

岩坪岡田島遺跡調査概報II

— 株式会社島井による自社工場の建設に伴う平成22年度の調査 —

2011年3月

高岡市教育委員会

岩坪岡田島遺跡調査概報Ⅱ

— 株式会社島井による自社工場の建設に伴う平成22年度の調査 —

2011年3月

高岡市教育委員会

序

岩坪岡田島遺跡は、高岡市街地の北西の国吉地区に所在します。

遺跡の北側には西山丘陵が連なり、南側の小矢部川により形成された肥沃な耕作地
がひろがります。

歌人として著名な大伴家持が國守として赴任した現在の高岡市は、東大寺の経済を
支えた東大寺領莊園の集中する地でもありますが、そのうちの須加莊については、岩
坪岡田島遺跡の周辺に所在したとする説があります。

このたびの発掘調査では、須加莊の存続時期を含む建物跡などを検出いたしました。
本書を郷土における歴史探求や学術研究にご活用いただければ幸いです。
末尾になりましたが、発掘調査の実施にご協力いただきました、関係各位、地元の
皆様に、厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

高岡市教育委員会

教育長 水見 哲正

例 言

1. 本書は、株式会社島井による自社工場の建設に伴う、岩坪岡田鳥道跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、高岡市教育委員会と株式会社島井、そして有限会社毛野考古学研究所の3者協定を締結し、高岡市教育委員会の指導のもとで有限会社毛野考古学研究所が実施した。
3. 調査は平成22年度に実施した。
現地調査：11月25日～12月28日
報告書作成：1月4日～3月25日
4. 調査関係者は以下のとおりである。
【高岡市教育委員会文化財課】
文化財課長：大巻宏治
統括専門員：高田克弘
【埋蔵文化財担当】
主幹：中野由美子
主査：根津明義
嘱託職員：田上和彦
嘱託職員：道振弘明
【有限会社毛野考古学研究所】
所長：長井正欣
調査員：常深尚
調査員：福江千英里
5. 現地調査及び報告書作成において、以下の各氏より御教示を得た。
(顔不同・敬称略)
赤澤徳明 池野正男 越前慎子 川崎晃 久々忠義 庄田知充 高橋浩二
宮本哲郎 向井裕知
6. 本書の執筆・編集は常深が担当した。

凡 例

1. 本書で示す方位は、座標北である。水平基準は海拔標高(m)である。
2. 本書における遺構記号は次のとおりである。
SA-柵址、SB-掘立柱建物址、SD-溝、SK-土坑
SN-帆状遺構、SX-凹地
3. 図面中のスクリーントーンは以下のことを表す。

 黒色処理  赤彩

目 次

序	
例 言	
凡 例	
日 次	
第1章 序 説	1
1. 遺跡概観	1
2. 調査に至る経緯	2
3. 調査の経過	3
4. 調査の概要	4
第2章 遺 構	5
1. 横塀	5
2. 埋立柱建物址	6
3. 溝	8
4. 土坑	8
5. 突状遺構	9
6. 凹地	9
第3章 遺 物	10
1. 古墳時代の土器類	10
2. 古代の土器類	10
3. 土製品	12
4. 木製品	12
5. 石製品	12
第4章 結 語	13

図面目次

図面01～12 遺構実測図

図面13～20 遺物実測図

図版目次

図版01～04 遺構写真

図版05～08 遺物写真

挿図目次

第1図	遺跡位置図〔1〕(1/5万)	1
第2図	遺跡位置図〔2〕(1/2万5千)	2
第3図	調査地区位置図(1/2500)	3
第4図	調査風景	4
第5図	掘立柱建物址概略図①(1/200)	6
第6図	掘立柱建物址概略図②(1/200)	7
第7図	土坑S K01実測図(1/80)	9
第8図	壇状遺構S N01全体系図(1/400)	9
第9図	磨製石斧実測図(1/2)	12
第10図	凹地S X02出土の土器(1/8)	13
第11図	古代の遺構変遷図(1/600)	15

別表目次

別表 1: 器類観察表	16～18
-------------	-------

調査參加者名簿 発 堀 石田敏行、大橋欣次、草間博義、冴木和雄、小板達朗、坂田智恵、桜井龍之、清水不二郎

新垣健、高岡誠一、高崎輝崇、高島幸男、寺岡秀作、道谷茂雄、富田幸吉、水田修

中谷久男、中野勝義、島山行男、馬連弘一、平野重則、深田力、松本真山美

山出昭三、古田都司宏

監理 木村公次、皆谷万須美、土井道昭、半澤利江

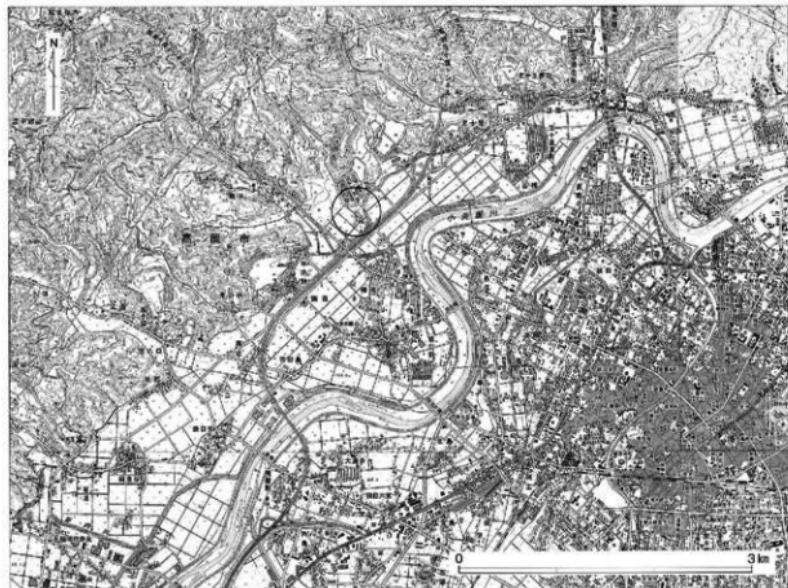
第1章 序 説

1. 遺跡概観

岩坪岡田島遺跡は、高岡市西部に連なる西山丘陵沿いにあって、頭川川と小矢部川の合流部付近に位置する。地形は丘陵末端の緩斜面と北北西に延びる開析谷からなり、標高は8~15mである。

頭川川の対岸丘陵部には倉谷古墳群・四十九古墳群・安居山古墳群などの古墳群があり、丘陵裾には問尽遺跡や手洗野赤浦遺跡が広がる。頭川川を遡れば左岸丘陵部に頭川城ヶ平横穴墓群があり、北東1.5kmの丘陵上には板屋谷内古墳群、平野部に須田藤の木遺跡が所在する。

高岡市による岩坪岡田島遺跡の既往の調査では、平成11年度の試掘調査（釜土地区等）で中世の溝や井戸が検出され、白磁や青磁が出土している。平成15年度の試掘調査（三芝硝材地区）では、古代の溝や古墳時代前期の土師器が検出された。平成16年度の試掘調査（南側駐車場地区）では溝や土坑とともに古墳時代以降の土師器や須恵器が出土している。同年の本調査（グラスキュープ地区）では、古墳時代後期から中世前期にかけての掘立柱建物址20棟や井戸が検出され、古代の縄繩陶器や灰釉陶器が出土している。このほか、富山県文化振興財團による平成11~13年度の本調査では、中世の掘立柱建物址や井戸を多数検出し、古代の造構面の1~1.5m下からは縄文時代前期（規ヶ森式・朝日下層式）の土器が出土している。



第1図 遺跡位置図〔1〕(1/5万)

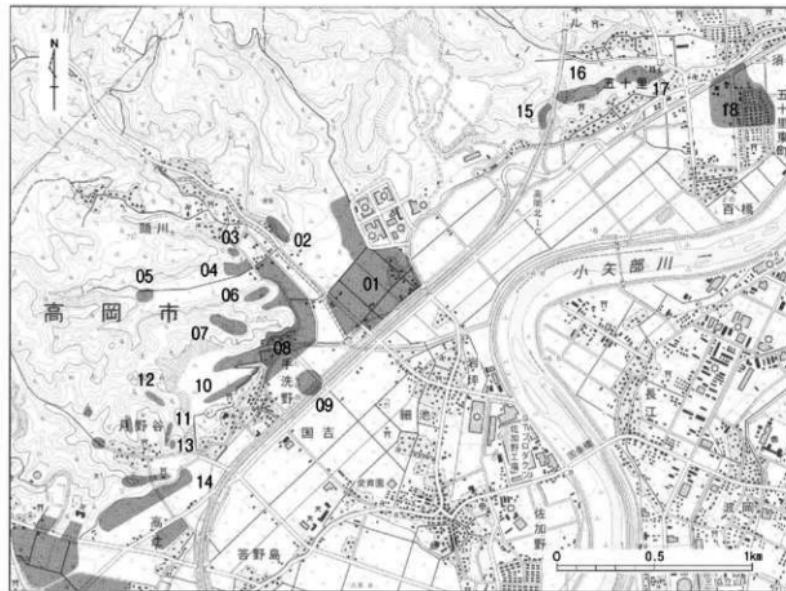
2. 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、株式会社島井による自社工場建設が計画され、同建設予定地における埋蔵文化財の取扱について、同社から高岡市教育委員会あてに照会が寄せられたことに始まる。

当該予定地は岩坪岡田島遺跡の埋蔵文化財包蔵地として周知されていたことから、開発行為を行う際には事前に埋蔵文化財の有無を確認するとともに、その所在が明らかとなった場合には、何らかの方法でその保護措置を行う必要があった。

これを受け、高岡市教育委員会と株式会社島井との間で協議の場が持たれ、平成21年9月から試掘調査を実施することで合意に至った。試掘調査は平成21年9月7日から同年9月18日まで高岡市教育委員会が実施したが、その結果、各トレンチから多数の遺構及び遺物が検出されたことから、「富山県発掘調査等対応基準」に照らし、建物部分については本発掘調査を実施する必要があるものと判断された。

この結果を踏まえ、高岡市教育委員会と株式会社島井との間に再び協議の場がもたれ、2者の方に、調査実施業者を加えた3者協定のもとに本調査を実施することで合意に至った。そして、株式会社島井による業者選定及び3者協定の締結を経て、平成22年11月25日から今回の本発掘調査に着手した次第である。



01.岩坪岡田島遺跡 02.頭川城ヶ平横穴墓群 03.頭川古墓群 04.滝ヶ谷内Ⅰ遺跡 05.滝ヶ谷内Ⅱ遺跡
06.安居山古墳群 07.四十九古墳群 08.筒尽遺跡 09.手洗野赤浦遺跡 10.倉谷古墳群 11.道ヶ谷内Ⅰ古墳群
12.道ヶ谷内Ⅱ古墳群 13.道ヶ谷内遺跡 14.立山古墳群 15.板屋谷内C古墳群 16.板屋谷内B古墳群
17.板屋谷内A古墳群 18.須田藤の木遺跡

第2図 遺跡位置図〔2〕(1/2万5千)

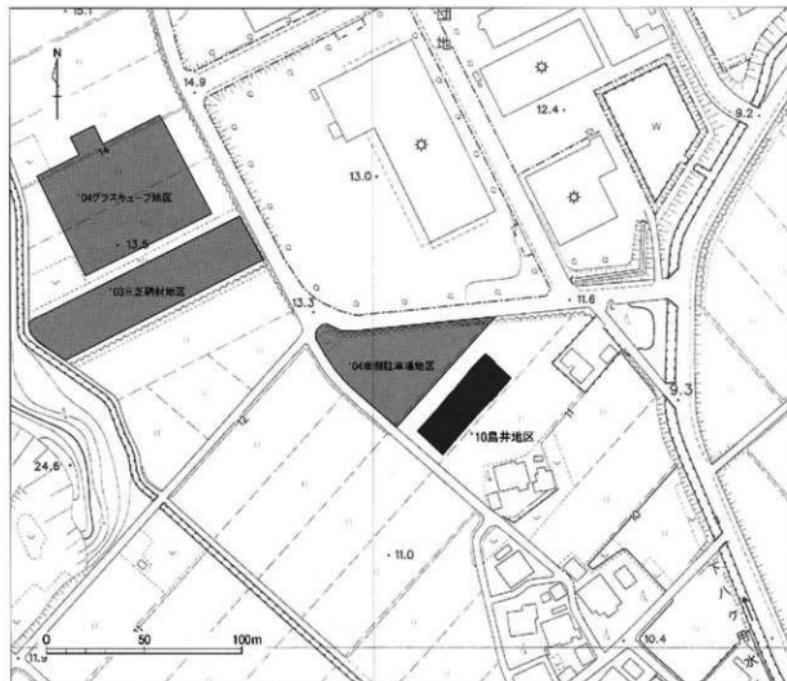
3. 調査の経過

本発掘調査は平成22年11月25日から同年12月28日まで実施した。11月25日より重機による表土掘削を開始した。表土は第Ⅰ層と第Ⅱ層～第Ⅲ層に分け、調査地区北西側へ運搬した。

11月30日から発掘作業員による包含層調査を開始した。包含層調査は調査地区的南西側から、10m四方のグリッドごとに進めた。途中、包含層中で遺構（溝 S D01・02）が検出されたため、その調査を終えてから、北東側の包含層調査を再開した。

12月15日までに包含層調査を終え、調査地区南西側より遺構の検出作業及び遺構調査に着手した。12月17日には古代の掘立柱建物址が検出され、その後も建物址の検出や柱根の出土が続いた。その後、調査地区北東部で凹地が検出され、古墳時代の遺物が確認されるに至った。12月24日には遺構調査をほぼ終了したが、積雪に見舞われた。調査地区全体の空撮は除雪作業後の12月28日であった。同日、器材等の撤収を行い、現地調査は終了した。翌平成23年1月には調査地区的埋戻し作業をおこなった。

整理作業は毛野考古学研究所富山支所で実施した。図面や写真、出土遺物の整理を経て、報告書編集作業を行った。



第3図 調査地区位置図 (1 / 2,500)

4. 調査の概要

基本層序

基本層序は第Ⅰ層：碎石層（現代、層厚5cm）、第Ⅱ層：黄褐色砂質土（現代、層厚30cm）、第Ⅲ層：黒褐色粘質土（現代、水田の床土、層厚3~5cm）、第Ⅳ層：褐色砂質土（層厚15~20cm）、第Ⅴ層：暗褐色砂質土（層厚10~15cm）、第Ⅵ層：灰白色砂質土である。第Ⅵ層の上面が遺構確認面の地山である。第Ⅳ層・第Ⅴ層は古墳時代から古代の遺物包含層で、古代の遺物が多い。第Ⅳ層でわずかに珠洲がみられるが、中世以降の遺物は極めて少ない。包含層中の遺物は、調査地区中央の溝を境に南側で多い傾向にある。現地表面の標高は約12mである。

検出遺構

柵址 8条（S A01~08）

掘立柱建物址 7棟（S B01~07）

溝 5条（S D01~05）

土坑 3基（S K01~03）

礎状遺構（S N01）

凹地 2カ所（S X01~02）

出土遺物

土器類：土師器・須恵器・白磁・珠洲

土製品：土錠・騎羽口

木製品：柱材・礎板

石製品：磨製石斧・砥石

グリッド

調査地区的グリッドは、世界測地系で平面直角座標系の第Ⅷ区標準系（原点は北緯36°00'00"、東経137°10'00"）に合わせた。東西をX軸、南北をY軸とし、グリッドの南西隅の数値がそのグリッドを表すものとし、X = 1、Y = 1の地点は、原点より西へ17.480km、北へ85.090km向かった地点である。一辺10m四方を一区画としてグリッドを割り付け、メッシュを表示した。



第4図 調査風景

左：表土剥削風景（西）、右：包含層調査風景（西）

第2章 遺構

検出された主な遺構は、柵址、掘立柱建物址、溝、土坑、畝状遺構であり、この他に列をなさない多くのピットが調査地区西側にあり、東側には凹地が存在する。このうち、溝S D01~03はV層上面にて、畝状遺構S N01はV層中にて検出したものである。それ以外の遺構、特に古代の柵址、掘立柱建物址はVI層上面で検出した。

1. 柵址

8条の柵址を検出し、層位や出土遺物などからいずれも古代の所産と考えられる。

柵址 S A01

調査地区西側(2.2区)で検出された。4基の柱穴がN-53°-Eの方向に並ぶ。柱穴の平面形状は円形を呈し、径25~55cmである。深さは15~23cmである。柱間距離は2.00~2.36mで、総長は6.44mを測る。北東側延長線上にS B03がある。遺物の出土はない。

柵址 S A02

調査地区中央(3.3~4区)で検出された。4基の柱穴がN-48°-Eの方向に並ぶ。柱穴の平面形状は円形ないし隅丸方形を呈し、径52~66cmである。深さは10~42cmである。柱間距離は2.60~3.96mで、総長は10.08mを測る。遺物の出土はない。

柵址 S A03

調査地区中央(2.3区)で検出された。4基の柱穴がN-40°-Wの方向に並び、北西側は調査区外となる。柱穴の平面形状は円形ないし隅丸方形を呈し、径40~68cmである。深さは18~43cmである。柱間距離は2.00~2.26mで、総長は6.30mを測る。4m東方にあるS B01とは柱筋が通ることから同時期と考えられる。遺物の出土はない。

柵址 S A04

調査地区中央(3~4.3~4区)で検出された。4基の柱穴がN-28°-Wの方向に並び、南東側は調査区外となる。柱穴の平面形状は円形を呈し、径60~64cmである。深さは31~38cmである。柱間距離は2.22~2.84mで、総長は7.36mを測る。約2m東方にあるS B02とは柱筋が通ることから同時期と考えられる。遺物の出土はない。

柵址 S A05

調査地区中央(3~4.4区)で検出された。3基の柱穴がN-52°-Eの方向に並ぶ。柱穴の平面形状は円形を呈し、径32~66cmである。深さは12~41cmである。柱間距離は2.66~2.70mで、総長は5.36mを測る。約2m南方にあるS B02とは柱筋が通ることから同時期と考えられる。遺物の出土はない。

柵址 S A06

調査地区中央(2~4.3~5区)で検出された。S B06の東・南・西の三方を区画するもので、それぞれの方位はN-39°-W、N-49°-E、N-42°-Wである。柱穴の平面形状は一辺60~80cmの隅丸方形のものと、径50~60cmの円形を呈するものがある。深さは前者が13~42cm、後者が5~16cmである。隅丸方形の柱穴はS B06と柱筋が接っており、S B06との距離は東側で6.28m、西側で7.00m、南側で2.72mである。南辺の総長は15.48mを測る。2基の柱穴から柱根や礎板が検出され、柱根はいずれも一辺20cmの隅丸方形を呈する(図版08)。遺物は奈良時代前半の土器部器、須恵器杯・蓋・壺が少量出土した。S D01・02に切られている。

柵址 S A07

調査地区西側（2.2～3区）で検出された。9基の柱穴がN-13°-Wの方向に並ぶ。S B01と重複し、S A07が新しい。柱穴の平面形状は円形を呈し、径20～36cmである。深さは8～24cmである。柱間距離は1.36～1.40mで、総長は10.88mを測る。遺物の出土はない。S A07の西側には同規模の柱穴が集中しており、複数回の建て替えが想定される。

柵址 S A08

調査地区東側（5.5～6区）で検出された。4基の柱穴がN-7°-Wの方向に並び、北側延長は調査区外となる。柱穴の平面形状は円形ないし隅丸方形を呈し、径50～82cmである。深さは10～46cmである。柱間距離は2.28～2.52mで、総長は7.08mを測る。遺物は南端の柱穴から古墳時代前期の土師器が少量出土しているが、凹地S X01からの混入である。調査区外になる東側の状況によっては掘立柱建物址の可能性もある。

2. 掘立柱建物址

7棟の掘立柱建物址が検出されている。層位や出土遺物からいずれも古代の所産である。概略図における柱穴の記号は、○：円形の掘り方、□：隅丸方形の掘り方、●：柱根をとどめるものを示している。

掘立柱建物址 S B01

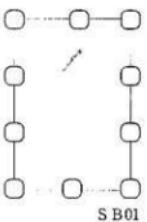
調査地区西側（2～3.3～4区）に位置する。桁行3間（2.35m、7.8尺等間）、梁間2間（2.35m、7.8尺等間）、総長は桁行7.05m、梁行4.70mの南北棟側柱建物である。建物の方向はN-40°-Wを示す。柱穴掘り方の平面形状は一辺72～80cmの隅丸方形を呈し、深さは28～41cmである。柱根は径20cm前後である。遺物は須恵器杯・蓋・平瓶（2242）などが少量出土している。S A02・03が方向性を同じくする。

掘立柱建物址 S B02

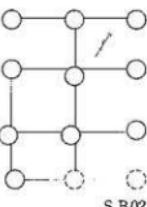
調査地区中央（4.3～4区）に位置する。桁行3間以上、梁間2間、総長は桁行6.66m以上、梁行5.18mの南北棟縦柱建物である。柱間は1.74～2.70mと不揃いである。建物の方向はN-34°-Wを示す。柱穴掘り方の平面形状は径38～92cmの円形を呈し、深さは15～47cmである。遺物は土師器壺、須恵器杯などが少量出土している。S A01・04・05、S B03が方向性を同じくする。

掘立柱建物址 S B03

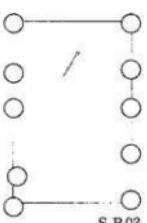
調査地区中央（2～3.3～4区）に位置する。桁行4間、梁間1間、総長は桁行7.60m、梁行4.86mの南北棟建物である。柱間は1.24～2.74mと不揃いである。建物の方向はN-33°-Wを示す。柱穴掘り方の平



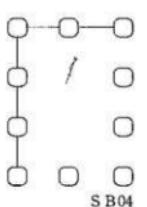
S B01



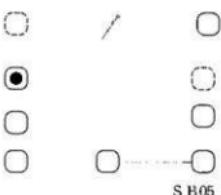
S B02



S B03



S B04



S B05

第5図 掘立柱建物址
概略図① (1/200)

面形状は径50~70cmの円形を呈し、深さは15~30cmである。遺物は土師器甕が少量出土している。S A01・04・05、S B02が方向性を同じくする。

掘立柱建物址 S B04

調査地区西側(2.2~3区)に位置する。桁行3間(2.07m, 6.9尺等間)、梁間2間(2.07m, 6.9尺等間)、総長は桁行6.21m、梁行4.14mの南北棟側柱建物である。建物の方向はN-20°-Wを示す。柱穴掘り方の平面形状は一辺68~82cmの隅丸方形を呈し、深さは30~52cmである。柱根は径15~20cmである。遺物は奈良時代前半の須恵器杯(2237)・蓋(2218)・横瓶・甕が少量出土している。S A07に切られている。

掘立柱建物址 S B05

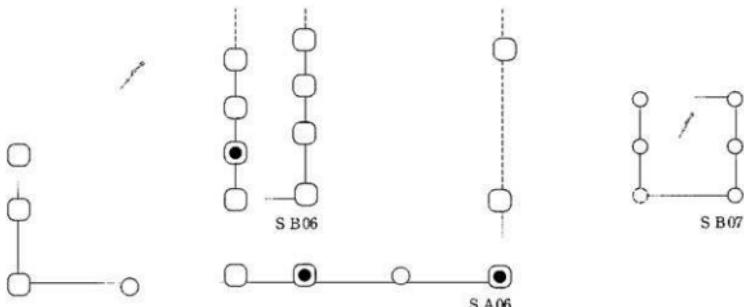
調査地区中央(2.3~3.4区)に位置する。桁行3間以上、梁間2間、総長は桁行6.0m以上、梁行7.54mの南北棟側柱建物と思われるが、北西側が調査区外となり全容は明らかではない。柱間は1.50~3.78mと不揃いである。建物の方向はN-30°-Wを示す。柱穴掘り方の平面形状は一辺62~110cm前後の隅丸方形ないし隅丸長方形を呈し、深さは22~46cmである。西側の柱穴では、一辺20~30cmで断面略長方形の柱根が検出された(図版08)。遺物は土師器甕、須恵器杯・蓋・甕が少量出土している。S D01・02に切られる。

掘立柱建物址 S B06

調査地区中央(3.4~5区)に位置する。桁行3間以上(1.50mないし2.10m, 5尺ないし7尺)、梁間1間、総長は桁行5.2m以上、梁行2.4mの南北棟建物と思われるが、北西側が調査区外となり全容は明らかではない。南端以外の東西方向の柱筋がやや不揃いであることを重視すれば、建物ではなく並列する柵址になる可能性もある(第11図二期B案)。建物の方向はN-42°-Wを示す。柱穴掘り方の平面形状は一辺75cm前後の隅丸方形を呈し、深さは33~69cmである。西側の柱穴では、一辺20cmの断面隅丸方形の柱根が検出された(図版08)。遺物は奈良時代前半の土師器杯(2101)、甕、須恵器杯・蓋(2216)、蓋が少量出土している。S D01・02に切られ、北を除く三方をS A06に区画される。

掘立柱建物址 S B07

調査地区西側(2.3~4区)に位置する。桁行2間以上、梁間1間、総長は桁行3.80m以上、梁行3.86mの南北棟建物と思われるが、北西側が調査区外となり全容は明らかではない。柱間は1.80~2.00mと不揃いである。建物の方向はN-28°-Wを示す。柱穴掘り方の平面形状は径40~60cmの円形を呈し、深さは5~24cmである。遺物は出土していない。S B04との新旧は不明である。



第6図 掘立柱建物址概略図② (1/200)

3. 溝

溝 S D01

調査地区中央（2～5.4区）で検出された東西に走向する溝である。南側に緩やかな弧を描いている。検出された溝中で最も新しく、S B05・06、S D02・03、S N01（2期）、S X01を切っている。S X01の土層断面で東側へさらに延びることが確認されている。溝の規模は幅0.3～1.9m、深さ6～25cmを測る。覆土はIV層・V層のブロックと粗砂を主体とする。グリッド（3.4区）では覆土1層の下面で光沢のある硬化面が検出され、埋没過程で道路跡として利用された時期があったものと考えられる。遺物は古代の土師器皿（2112）、須恵器杯・蓋などが少量出土し、硬化面形成以降の上層には珠洲の破片がわずかに混入してくる。平安時代後期に掘削され、道路への転用を経て、中世には埋没したと考えられる。

溝 S D02

調査地区中央（2～5.4～5区）で検出された東西に直線的に延びる溝である。S A06、S B05・06、S D03、S N01（2期）、S X01を切り、S D01に切られている。S X01の土層断面で東側へさらに延びることが確認されている。全体的な溝の規模は幅1.5～3.2m、深さ20～32cmを測るが、土層観察によると幅0.7～1.3m、深さ20～30cmの溝が何度も流路を変えて流れた痕跡が認められる。覆土は灰白色の砂を多く含む水性堆積土である。遺物は古代の土師器皿（2118）、壺、須恵器蓋（2210）、杯、土錐等が非常に多く出土している。時期は平安時代後期と考えられる。

溝 S D03

調査地区中央（2～4.4～5区）で検出された緩やかに蛇行しながら東西に延びる溝である。S D01・02に切られ、S X01とは同時存在の可能性がある。S D02に大部分を切られるため全容は不明だが、溝の規模は幅1.5m以上、深さ20cmを測る。覆土は黒褐色砂質土を主体とする。遺物は古墳時代の高杯（1104・1109）、古代の土師器皿（2105）、碗（2115）、須恵器蓋（2210）、杯（2220）などが出土している。時期は平安時代後期と考えられる。

溝 S D04

調査地区東側（4.5～6区）で検出された南北に延びる溝である。北端は後世の削平によって途切れている。溝の規模は幅0.5～1.0m、深さ11～18cmを測る。覆土は黒褐色砂質土である。遺物は古墳時代の高杯（1111）、古代の土師器壺（2122）、須恵器杯（2226・2227・2233）等が出土している。時期は奈良時代前半と考えられ、S A08と方位が揃っている。

溝 S D05

調査地区東側（5.5～6区）で検出された円形に廻る溝である。溝の規模は幅0.5～1.0m、深さ5～12cmを測る。南東部はプランが不明瞭であったが、調査区壁面で溝の延長が確認され、およそ径8mの円形に廻ることが分かる。S D05は凹地S X02の埋没後に掘削された溝である。覆土は黒色粘質土である。遺物はS X02からの混入である古墳時代の土師器高杯（1105・1109）のほか、古代の土師器皿（2103）、壺（2123）などが出土している。時期は平安時代後期と考えられる。

4. 土坑

土坑 S K01

調査地区西側（1～2.3区）で検出された土坑である（第7図）。平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸1.28m、短軸0.56m、深さ15cmを測る。長軸方位はN71°-Eを示し、近接するS B04やS K02の方位に類似する。遺

物は出土していない。

土坑SK02

調査地区西側（2.3区）で検出された土坑である。平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸1.38m、短軸0.61m、深さ15cmを測る。長軸方位はN-66°-Eを示す。遺物は出土していない。形状、規模、方位ともにSK01と類似しており、関連が窺われる。

土坑SK03

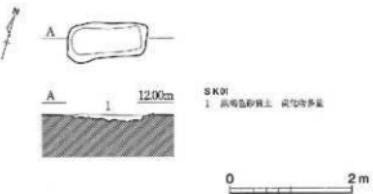
調査地区中央（2.4区）で検出された土坑である。平面形状は長軸1.39m、短軸0.70m以上 の楕円形を呈する。深さ22cmを測る。近接するSB05・06との関連で、柱根や柱の抜き取り痕に注意したが、そのような痕跡はみられなかった。遺物は出土していない。

5. 畫状遺構

調査地区中央から西側にかけて、V層中で検出された畵状遺構である（SK01）。幅20~60cm、深さ5~20cmの溝が50~70cmの間隔で並走している。走行方向や切り合いから3期に大別され、1期、2期、3期へと変遷するものと考えられる（第8図）。各期の主軸方位は1期N-38°-W、2期N-20°-W、3期N-58°-Eである。遺物は土師器（2102）、壺（2121・2124）、須恵器壺（2211・2214・2215）、杯（2221・2223・2229・2236・2239）、鍋（2250）、磨製石斧（5101）などが出土している。時期は平安時代前期と考えられる。

6. 凹地

調査区南東隅で凹地が検出され、西側をSX01、東側をSX02とした。V層の下に位置する。凹地には厚さ10~20cmの黒色土が堆積し、SX02からは古墳時代前期の楕・高杯・壺・甕がまとめて出土した（第10図）。黒色土の上には地山ブロックを多量に含む厚さ10cmの黒褐色土が水平に堆積しており、人為的な整地の可能性がある。周辺の柱穴状のビットはこの黒褐色土を掘り込んでいる。



第7図 土坑SK01実測図（1/80）



第8図 畵状遺構SK01全体図 縦尺1/400

第3章 遺物

1. 古墳時代の土器類

土器

図面13～15・1101～1127。1101は半底の椀である。内外面のミガキは丁寧で、胎土に海綿骨針を多く含む。1102～1114は高杯である。1102～1105・1109は杯部下位に後をもつ。1102はわずかに内湾気味に立ち上がり、口縁端部を面取りする。1105は口縁端部が水平に開く。1106は口縁部が剥落したもの。ナデのみで指頭圧痕も残る雑な仕上げである。1102・1105はハケメ後に丁寧なヘラミガキを施す。1103・1104は赤褐色粒を多く含む軟質な胎土であるが、口縁端部を薄く仕上げるなど丁寧な成形である。脚部はいずれも裾部が屈曲する柱状脚であるが、1110・1112は下半にやや膨らみのある脚である。1107は杯部内外面と脚部外面がハケメ後にナデを施す。1110はハケメ後にヘラミガキである。1114は内面にしほり痕がある。胎土に海綿骨針を含むのは1102・1103・1105・1106・1109～1114である。

1115～1118は亞である。1115は頸部が直立気味に立ち上がる大型の壺である。頸部にハケメが残る。1116は二重口縁斎である。頸部は短く直立して立ち上がる。外側はヘラミガキだが磨滅している。海綿骨針を多量に含む。1117・1118は小型の壺である。1117はわずかに内湾する口縁部で、外側から口縁部内面までを丁寧に磨いている。1118は丸底で、橙色のマーブル状の胎土には海綿骨針が微量に含まれる。

1119～1123はくの字壺である。1119は口縁端部を面取りする。球形の胴部は外側面ともハケ調整され、底部は丸底である。胎土に海綿骨針を多く含む。1120・1121は口縁端部を丸く収める。胴部はハケ調整である。内面に粘土紐の接合痕が顯著に残り、胎土には露母が含まれる。1120の丸底の底部は胴部とは別作りである。1122は口縁端部を丸く収める。胴部はタテ方向のハケ調整で、頸部はヨコナデ、口縁部内外面には指頭圧痕が強く残る。1123は外側面ともハケ調整である。

1124～1126はS X02から出土した口縁部内面が肥厚する布留式の壺である。1124は口縁端部が内傾する。肩部外側のタテハケ後に頸部を丁寧にヨコナデ調整する。肩部内面はヨコ方向のケズリにより胴部に向かって器壁を薄くしている。胎土に海綿骨針を多く含む。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。1125は口縁端部は水平である。肩部外側のタテハケ後にヨコハケを施し、頸部のヨコナデ調整は弱い。胴部には斜方向のハケもみられる。口縁部内面のヨコナデ調整は弱く、斜方向のハケが部分的に残る。胴部内面のケズリはやや雑で器壁は厚手である。肩部外側にはヘラ状具による斜方向の刺突が4カ所にみられる。胎土には海綿骨針と角閃石を含む。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。1126は口縁端部が内傾する。底部は丸底気味だが中央がわずかに窪む。胴部外側はタテハケ後に肩部にヨコハケを施し、頸部をヨコナデ調整する。内面は口縁部に斜方向のハケメと頸部に弱い指押えがみられる。胴部はヘラケズリで、下半には指頭圧痕が顕著である。胎土に海綿骨針を多く含み、色調はにぶい黄橙色、焼成は良好である。胴部外側に煤の付着がみられる。

1127は小型壺である。やや肩が張る胴部で、外側面ヘラケズリである。胎土には海綿骨針が含まれる。

須恵器

図面15～1201～1202。古墳時代後期の須恵器である。1201はS X01出土の杯身である。胎土に海綿骨針を微量に含む。1202はS D02出土の壺である。体部最大径付近にカキ目と円孔がある。底部内面は幅5mmの棒状工具でナデつけられている。1201・1202ともに断面からは茶紫色の木漆元部分が観察される。

2. 古代の土器類

飛鳥時代以降の土器類である。

土師器

図面16～2101～2129。2101・2102は奈良時代の皿・杯である。内面黒色処理で外面赤彩である。

2103～2111は平安時代の椀ないし皿である。2111・2110は糸切り後に棒状圧痕が、2103には板状圧痕がみられる。2106は右回転糸切り後に板状圧痕がみられ、内外面赤彩である。2109の底部中央には糸切り後に径3mmの丸棒状工具による刺突が2カ所にみられる（深さは5mm）。2112～2115は高台の付く碗である。2112は底部外面に板状圧痕があり、内面は黒色処理を施す。2113は右回転の糸切り痕を残す。2114の底部外面には花弁状のナデつけがみられる。2116～2119は柱状高台の皿である。2116は底部外面を指揮さえよってわざかに窪ませている。2118の底部外面の周縁部には径2mmの棒状具による斜めの刺突がみられる。2103・2104・2105・2107・2109・2110・2111・2117の底部には右回転の糸切り痕が残る。2105の色調は橙色を呈し、その他は灰白色が多い。胎土に海綿骨針を含むのは2101～2104・2106・2107・2109・2110・2115～2118である。

2120～2124は甕である。2120は口縁部が短いくの字甕である。胴部内面は粗いハケメ、外面と口縁部内面は細かいハケメを施す。2121～2124はロクロ成形の甕である。2122・2123は外外面にカキメを施す。

2125・2126は鍋である。胴部上半はカキメだが、2126は磨滅する。2125の内面と2126の外外面に煤が付着する。2127～2129は牛角状把手が付く鍋である。2127はロクロ成形、2128・2129は非ロクロ成形である。胎土に海綿骨針を含むのは2122・2125・2126である。

須恵器

図面17～20・2201～2251。2201～2208は内面にかえりをもつ杯蓋である。法量は口径17.2～20.4cmと12.0cmの大小がある。天井部は全て回転ヘラケズリを施し、天井部からなだらかに傾斜するもの（2201・2202・2205）と、天井部が平坦で肩で屈曲するもの（2204・2206・2207・2208）がある。かえりの先端は低く丸みのあるものが多いが、2203・2206では端部がやや鋭い。2202の摘みは扁平な宝珠形である。天井部内面の仕上げナデを確認できるものは2202・2204・2205である。

2209～2219はかえりのつかない杯蓋である。法量は口径13.6～18.8cmである。天井部からなだらかに傾斜するもの（2209・2210・2215・2217）と天井部が平坦で肩が屈曲するもの（2212・2213・2216・2219）、全体に扁平なもの（2211・2214）がある。口縁端部は、玉縁状に短く折り曲げるもの（2209・2211・2219）、三角形状に摘み出すもの（2212・2213・2214）、嘴状に摘み出すもの（2210・2215・2216・2217・2218）がある。摘みは全て宝珠形で、2210の摘みは径3.8cmと大型である。天井部は2219がヘラ切り無調整、その他は回転ヘラケズリ調整を施す。2217は左回転のヘラケズリである。天井部内面に仕上げナデを施すのは2209・2210・2211・2214・2216である。2219は天井部内面が磨滅しており、皿に転用された可能性がある。2215は天井部内面に焼成前のヘラ記号「×」があり、2214・2217の外面上には重ね焼きの痕跡がある。

2220～2225は杯Aである。口径は11.3～13.7cm、器高は2.8～3.7cmである。底部はヘラ切りで、2224はヘラ切り後に手持ちヘラケズリ調整、2220・2223はヘラ切り後にナデを施す。内面に仕上げナデを施すのは2221である。2220・2221は胎土に海綿骨針を含む。

2226～2241は杯Bである。口径は10.2～17.8cm、器高は3.0～6.4cmである。底部はヘラ切りで、2227・2231はヘラ切り後に回転ヘラケズリ調整を、2228はヘラ切り後にナデを施す。内面に仕上げナデを施すのは2226・2229・2231・2232・2234である。2227の色調はにぶい橙色を呈する。2240・2241は棱杯である。

2242～2251は瓶・壺・鍋である。2242は平瓶の口頸部で、横描波状文を施す。2243は長頸瓶である。口頸部に3条の沈線がある。2244は断面三角形の凸帯がつく双耳瓶である。2245～2249は甕である。2245は口縁

端部を水平に摘み出す。2246は口縁内面が肥厚する。2247は頸部内面に指頭圧痕が強く残る。2245～2247・2249は胴部外側は平行叩き、内面は同心円文相当具であるが、2249は二種の叩き板が使われている。2248は口頸部に描画波状文をもつ大甕である。2250は鍋である。外面は叩き後にカキメ、内面は当具痕後にナデである。環状把手（2251）は同一個体と考えられる。

白磁

図面20～2301～2303。2301は肉厚な玉縁を持つ続の口縁部である。胎土はやや粗雑で、灰白色の釉には気泡や貫入がみられる。太宰府分類の白磁碗IV類に位置づけられる。2302は内面見込みに段を有する椀の底部である。高台の削り出しが浅い。灰白色の釉は一部高台までかけられている。白磁碗IV類に位置づけられる。2303は内面に飾口文を有する椀の底部である。灰オリーブ色の釉が体部と高台部の境までかかり、一部は高台部に及んでいる。白磁碗VI類に位置づけられる。

3. 土製品

土錘

図面20～3101～3106。土錘は完形品が約60点、欠損品が約50点出土しており、大きさや形状の異なるもの6点を図示した。形状は球状のもの（3102）と管状のものがある。3101は両端を面取りする。長さ7.7cm、幅4.3cm、孔径1.2cm、重さ109gである。色調は灰白色で胎土に海綿骨針が多く含む。3102は球状を呈し、長さ5.2cm、幅5.5cm、孔径2.4cm、重さ101gである。胎土に赤褐色粒が多く含む。3103は両端を面取りする。長さ5.4cm、幅3.2cm、孔径0.6cm、重さ50gである。3104は片側の端部のみ面取りする。長さ4.4cm、幅2.8cm、孔径1.3cm、重さ26gである。胎土はマーブル状で、還元焼成である。3105は長さ3.9cm、幅2.1cm、孔径0.5cm、重さ14gである。3106は長さ4.3cm、幅2.0cm、孔径0.5cm、重さ7gである。胎土に海綿骨針が含まれる。

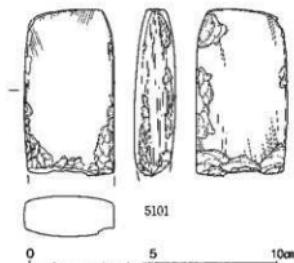
4. 木製品

S B05から柱材（4101）、S B06から柱材（4102）、S A06から柱材（4103・4104）と礎板（4105）が出土している。柱材は断面が一片25cm前後の隅丸方形である。礎板（4105）は40cm×25cmの長方形、厚さ10cmである（図版08）。

5. 石製品

磨製石斧

S N01から蛇紋岩製の磨製石斧1点が出土している（5101、第9図）。残長5.85cm、幅4.65cm、厚さ1.70cmで、表面は丁寧に研磨されている。欠損した刃部に連続する剥離痕がみられ、二次利用を意図した加工痕と考えられる。



第9図 磨製石斧実測図（1／2）

第4章 結語

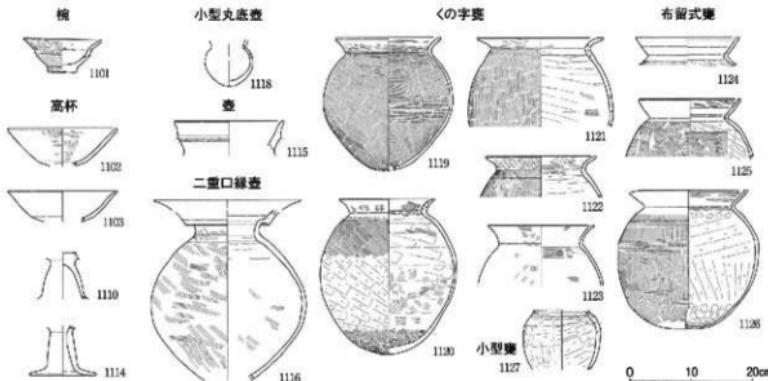
今回の調査について時期ごとの成果をまとめて結語としたい。

古墳時代前期

凹地S X02から古墳時代前期の土師器が出土した。既往の調査や間尽遺跡でも古墳時代前期の土器が出土していたが、今回は層位的にまとまった資料が得られた。器種は碗・高杯・壺・甕で構成され、小型器台は出土していない。高杯は屈折脚を呈する畿内系が大部分で、口縁部が内湾する東海系がわずかに残る。壺は小型丸底壺と短頸の二重口縁壺がある。甕には有段口縁甕が含まれず、くの字甕が主体をなしつつ布留式甕も一定量存在する。くの字甕は丸底で胴部内外面ハケ調整である。能登型甕の特徴とされる口縁端部を面取りするものもある。肩に刺突のある布留式甕(1125)は他の2点の布留式甕と胎土が異なっていることから、搬入品の可能性も考慮しておきたい。これらの土器様相は、概ね漆町編年の9群(田嶋1986)に相当すると考えられる。この時期の越中西部では、当遺跡から小矢部川を遡った砺波地域に、県内最大級の前方後円墳である関野1号墳が造営される。今回の資料は、多数の布留式甕を出土した小矢部市竹倉島遺跡と同様に、越中西部における畿内的土器様式の波及を示すものと位置づけられる。

飛鳥時代～奈良時代

既往の調査では7世紀前葉の遺物がみられたが(富山県財団2007)、今回の調査では7世紀末から遺物が出土しはじめ、8世紀前半にかけて遺物量がとくに多い。これに関連して凹地S X01・02の埋没土が注意される。凹地には上層と下層の間に整地層と思しきブロック土の人為的な水平堆積がみられ、下層中からは前述の古墳時代の遺物のほか、S X01から7世紀末の須恵器甕(2205)が出土している。凹地の上層及び周辺の掘立柱建物址からは8世紀前葉以降の遺物が出土することから、整地が行われたのは7世紀末から8世紀初頭頃と推測される。検出された掘立柱建物址はこの整地以後に建てられたものである。



第10図 凹地S X02出土の土師器 縦尺1/8

掘立柱建物址は、出土遺物や位置関係などからⅠ～Ⅴ期に分けられるが（第11図）、このうちⅢ期までがこの時期のものである。Ⅰ期及びⅡ期の柱穴は隅丸方形で、規模が大きい。柱間距離がⅡ期以降より短いこと、S B05で確認されたように、掘り方の埋土が版築状になるものがあることが特徴である。Ⅱ期のS B06は長屋風に復元したが、並列する2基の構造になる可能性も考えられる（Ⅱ期A案・B案）。S B06を取り囲むS A06の南辺は東方に延び、Ⅱ期には調査地区周辺に整然とした建物群が広がっている可能性がある。Ⅲ期のS B01の柱穴は、隅丸方形の形状を保っているが小規模となる。建物の主軸方位や構（S A02・03）の位置がⅡ期を踏襲しているが、Ⅱ期のような大きな区画はみられない。現時点ではⅠ～Ⅲ期を7世紀末から8世紀中葉と考えている。

当遺跡にはほど近い頭川城ヶ平横穴墓群は、6世紀末から7世紀中葉にかけて造営され、7世紀後葉まで追葬が行われる。当遺跡は同横穴墓群の造営集団の可能性が高いとされるが（大野2009）、今回の建物址は横穴墓の時期に後続するものである。集落の中心部は本調査地区の北方に存在するものと考えられるが、平成15年度調査（三芝硝材地区）で検出されている隅丸方形の土坑群について、本調査地と同時期の掘立柱建物址になる可能性を指摘しておきたい。

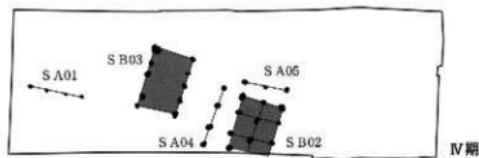
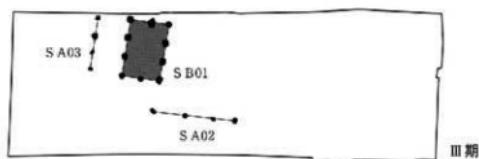
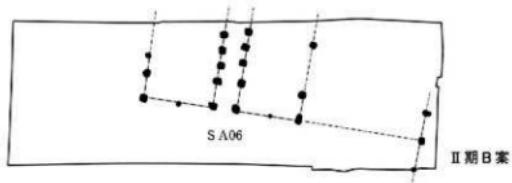
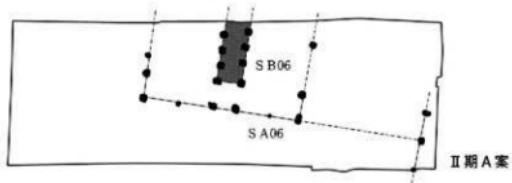
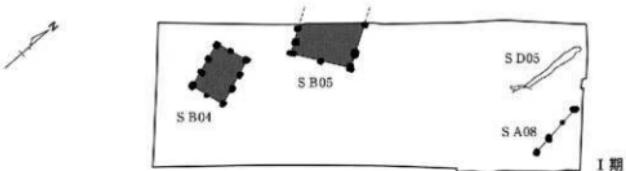
平安時代～中世

建物址はⅢ期で一度途絶え、平安時代前期には烟と思われる畝状遺構が広がる。畝状遺構は3段階の変遷が捉えられた（第8図）。その後、平安時代後期になって土師器皿や白磁などの土器が出土し始めるが、手づくり成形の皿や珠洲を伴わず、11世紀後半代を中心とするものである。Ⅳ期・Ⅴ期とした建物はこの時期のものと考えられる。この時期の建物は柱穴が円形基調となり、柱穴規模はさらに小さくなる。縦柱の建物を含み、柱间距隔や柱筋はやや不揃いである。S D03の掘削もこの時期と考えられ、この東西溝はその後S D02、S D01と繰り返し掘削され、中世まで継続する。

おわりに

当調査地区周辺は、西山丘陵から派生した小丘陵が平野部へ張り出した緩斜面上に位置している。東側では間に迫る小矢部川の水運を掌握し、西側では源川の谷の入口を制することが可能である。小矢部川の洪水の影響を受けにくい微高地でもあり、平野部や二上山の眺望も得られる。また既往の調査を含め、製鉄関連遺物や土鍾の大量出土からは、多様な生産基盤にも恵まれた土地であったことが窺われる。古墳時代以来の集落形成にはこのような立地が背景にあったものと思われる。その在地的な集落が7世紀末から8世紀前半の時期に顕在化してくることは、西山丘陵沿いに推定される古代北陸道の成立が契機となっている可能性を考えたい。既往の調査を含め、この時期の官衙的な遺物は抽出できていないが、岡尽遺跡では白鳳時代とみられる布日瓦の出土から、瓦の供給先か瓦窯跡も想定される（高岡市1985）など、律令制施行を前後する時期における当地周辺の動向は今後も注意が必要である。

当遺跡周辺は、古代の越中国射水郡に設定された東大寺領荘園「須加莊」の比定地のひとつである（和田1959）。近年は当遺跡の東方、高岡市五十里地内を比定地とする説（金田1998、根津2005）が有力視されつつある。当調査地区的掘立柱建物址の時期は8世紀前半を中心としており、須加莊が設定される8世紀中頃以降には集落の痕跡が希薄となり、煙地へと転換していく。平成16年度調査（グラスキューブ地区）で数棟の掘立柱建物址とともに9世紀後半代の綠釉・灰釉陶器が出土していることは注意されるものの、須加莊を当地に比定する考古学的物証はいまだ乏しいと言わざるを得ない状況である。しかし8世紀前半の建物が8世紀後半に維続しないことは、間接的にでも須加莊成立の影響を受けた可能性があり、須加莊が周辺集落に及ぼした影響の有無も視野に入れて比定地を検討していく必要があるものと考えられる。



第11図 古代の造構変遷図 縮尺1/600

別表 土器類観察表

番号	図面	種類	口径	特徴	微	出土位置
1. 古墳時代の土器類、土師器・須恵器						
1101	13	土師器・椀	12.6	底径 4.9cm、器高 5.6cm。内外面はハケメ後にヘラミガキ。	S X02	
1102	13	土師器・高杯	17.5	杯部下位に棱をもつ。内外面はヘラミガキ。	S X02	
1103	13	土師器・高杯	17.9	杯部下位に棱を持つ。	S X02	
1104	13	土師器・高杯	23.3	杯部下位に棱をもつ。	S D03	
1105	13	土師器・高杯	20.3	杯部下位に棱をもつ。内外面はハケメ後にヘラミガキ。	S D05	
1106	13	土師器・高杯	-	L.I.縁部剥落。内外面ナデ痕。	S D03	
1107	13	土師器・高杯	-	柱状の脚部。杯部内外面と脚部外面はハケメ後にナデ。	包含層	
1108	13	土師器・高杯	-	崩滅。	VI層上部	
1109	13	土師器・高杯	-	杯部下位に棱をもつ。	S D05	
1110	13	土師器・高杯	-	脚部の棱は崩折して開く。外面はハケメ後にヘラミガキだが崩滅。	S X02	
1111	13	土師器・高杯	-	脚部の棱は崩折して開く。外面はヘラミガキ。	S D04	
1112	13	土師器・高杯	-	脚部の棱は崩折して開く。	VI層上部	
1113	13	土師器・高杯	-	底径 11.2cm。脚部の棱は崩折して開く。崩滅。	包含層	
1114	13	土師器・高杯	-	底径 11.0cm。脚部の棱は崩折して開く。内面にしほり痕。	S X02	
1115	14	土師器・壺	17.6	頭部はハケメ後にヨコナデ調整。	S X01	
1116	14	土師器・壺	-	二重口縁壺。外面はヘラミガキ。	S X02	
1117	14	土師器・壺	9.9	小型の壺。内外曲は丁寧なヘラミガキ。	VI層上部	
1118	14	土師器・壺	-	小型丸底壺。	S X02	
1119	14	土師器・壺	17.2	推定高 21.8cm。胴部外面はハケ調整。	S X02	
1120	14	土師器・壺	15.6	器高 25.6cm。L.I.縁部は丸く外反し、丸底。内面に粘土積み上げ痕。	S X02	
1121	15	土師器・壺	20.7	口縁部は大きく外反する。頭部は縱方向のハケ調整。	S X02	
1122	15	土師器・壺	18.0	胴部外而と口縁部内面はハケメ。口縁部外面に指頭圧痕。	S X02	
1123	15	土師器・壺	17.3	内外面ハケメだが崩滅。	S X02	
1124	15	土師器・壺	16.1	口縁部内面が肥厚する。胴部外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	S X02	
1125	15	土師器・壺	16.7	L.I.縁部内面が肥厚。胴部外面ハケメ、内面ヘラケズリ。肩部に削突。	S X02	
1126	15	土師器・壺	19.4	口縁部内面が肥厚。胴部外面ハケメ、内面ヘラケズリと指痕圧痕。	S X02	
1127	15	土師器・壺	-	胴部の内外面とも強くヘラケズリされる。	S X02	
1201	15	須恵器・杯身	-	底部はヘラケズリ。受部に蓋の重ね焼き痕。	S X01	
1202	15	須恵器・越	-	胴部外面に穿孔とカキメ、底部内面ナデ。	S D02	
2. 古代の土器類、土師器・須恵器、白磁						
2101	16	土師器・皿	13.8	口縁部ヨコナデ、外面赤彩、内面黒色処理。	S B06	
2102	16	土師器・杯	14.4	外面赤彩、内面黑色処理。	S N01	
2103	16	土師器・皿	9.7	底径 5.7cm、器高 2.8cm。底部は回転条切り後に板状圧痕。	S D05	
2104	16	土師器・皿	8.8	底径 4.4cm、器高 2.0cm。底部は回転条切り。	包含層	
2105	16	土師器・皿	8.7	底径 4.0cm、器高 2.1cm。底部は回転条切り。	S D03	

番号	回転	種類	寸法	特徴	微	出土位置
2106	16	土器器皿	-	底径 6.8cm。底部は回転糸切り後に板状圧痕。内外面赤彩。		包含層
2107	16	土器器皿	-	底径 4.7cm。底部は回転糸切り。		包含層
2108	16	土器器皿	-	底径 4.7cm。底部は磨滅。		包含層
2109	16	土器器皿	-	底径 5.1cm。底部は回転糸切り後に棒状只の刺突痕。		包含層
2110	16	土器器皿	-	底径 4.9cm。底部は回転糸切り後に棒状圧痕。		包含層
2111	16	土器器皿	-	底径 5.3cm。底部は回転糸切り後に棒状圧痕。		包含層
2112	16	土器器皿	-	底径 6.6cm。底部に板状圧痕。内面黒色処理。	S D01	
2113	16	土器器皿	-	底径 8.0cm。底部は回転糸切り。	VI層上面	
2114	16	土器器皿	-	底径 7.0cm。底部外間に花弁状のナデつけ。	VI層上面	
2115	16	土器器皿	-	底径 4.8cm。	S D03	
2116	16	土器器皿	-	底径 7.0cm。	包含層	
2117	16	土器器皿	-	底径 5.5cm。底部は回転糸切り。	包含層	
2118	16	土器器皿	-	底径 4.6cm。	S D02	
2119	16	土器器皿	-	底径 4.2cm。	包含層	
2120	16	土器器皿	14.3	内外面はハケメ。	包含層	
2121	16	土器器皿	18.5			S N01
2122	16	土器器皿	19.2	側部内外面はカキメ。		S D01
2123	16	土器器皿	21.0	側部内外面はカキメ。		S D05
2124	16	土器器皿	-			S N01
2125	16	土器器皿	33.0	側部内外面はカキメ。		包含層
2126	16	土器器皿	32.4	内面とも磨滅。		VI層上面
2127	16	土器器皿	11.9	ロクロ成形。		包含層
2128	16	土器器皿	-	把手部分。側部内外面はハケメ。		包含層
2129	16	土器器皿	-	把手部分。全体に磨滅。		包含層
2201	17	須恵器・杯蓋	20.0	摘み剥落。天井部へラケズリ。内面にかえりがつく。		S D02-03, S N01
2202	17	須恵器・杯蓋	19.4	器高 3.5cm。大井部へラケズリ、内面仕上げナデ。内面にかえり。		包含層
2203	17	須恵器・杯蓋	20.4	内面にかえりがつく。		包含層
2204	17	須恵器・杯蓋	18.1	摘み剥落。大井部へラケズリ、内面仕上げナデ。小さなかえりがつく。		包含層
2205	17	須恵器・杯蓋	18.4	天井部へラケズリ、内面仕上げナデ。内面に明瞭なかえりがつく。	S X01	
2206	17	須恵器・杯蓋	17.2	天井部へラケズリ。内面に明瞭なかえりがつく。		包含層
2207	17	須恵器・杯蓋	12.0	天井部へラケズリ。内面に明瞭なかえりがつく。		包含層
2208	17	須恵器・杯蓋	12.0	天井部へラケズリ。内面にかえりがつく。		包含層
2209	17	須恵器・杯蓋	18.8	天井部は回転へラケズリ調整で宝珠形摘みがつく。内面仕上げナデ。	S X01	
2210	17	須恵器・杯蓋	18.2	天井部は回転へラケズリ調整で宝珠形摘みがつく。内面仕上げナデ。	S D02-03	
2211	17	須恵器・杯蓋	17.6	天井部は回転へラケズリ調整で宝珠形摘みがつく。内面仕上げナデ。	S N01	
2212	17	須恵器・杯蓋	15.6	天井部は回転へラケズリ調整で宝珠形摘みがつく。		包含層
2213	17	須恵器・杯蓋	15.5	天井部は回転へラケズリ調整で宝珠形摘みがつく。		包含層
2214	17	須恵器・杯蓋	15.7	天井部は回転へラケズリ調整で宝珠形摘みがつく。内面仕上げナデ。	S N01	
2215	17	須恵器・杯蓋	16.3	天井部は回転へラケズリ調整で宝珠形摘みがつく。内面にハラ記号「×」。	S N01	
2216	17	須恵器・杯蓋	15.9	天井部は回転へラケズリ調整で宝珠形摘みがつく。内面仕上げナデ。	S B06	
2217	17	須恵器・杯蓋	14.7	天井部は回転へラケズリ調整で宝珠形摘みがつく。	ピット	
2218	17	須恵器・杯蓋	13.6	器壁薄い。	S B04	

番号	図面	種類	11径	特徴	微	出土位置
2219	17	須恵器・杯壹	14.5	天井部はヘラ切りで宝珠形模みがつく。内面磨滅。		包含層
2220	18	須恵器・杯A	13.7	器高3.5cm。底部はヘラ切り。内面仕上げナデ。		S D03
2221	18	須恵器・杯A	11.3	底径9.3、器高3.2cm。底部はヘラ切り。内面仕上げナデ。		S N01
2222	18	須恵器・杯A	11.7	底径9.4、器高3.3cm。底部はヘラ切り。		包含層
2223	18	須恵器・杯A	12.3	底径9.2、器高3.6cm。底部はヘラ切り後にナデ。		S N01
2224	18	須恵器・杯A	11.3	底径6.4、器高3.7cm。底部はヘラ切り後に手持ちヘラケズリ調整。		包含層
2225	18	須恵器・杯A	11.4	底径7.8、器高2.8cm。底部はヘラ切り。		包含層
2226	18	須恵器・杯B	17.8	底径10.6、器高6.4cm。底部はヘラ切り。内面仕上げナデ。		S D04
2227	18	須恵器・杯B	15.2	底径10.9、器高3.8cm。底部は回転ヘラケズリ調整。		S D04
2228	18	須恵器・杯B	14.6	底径7.8、器高4.1cm。底部はヘラ切り後にナデ。		包含層
2229	18	須恵器・杯B	14.7	底径8.5、器高4.4cm。底部はヘラ切り。内面仕上げナデ。		S N01、包含層
2230	18	須恵器・杯B	-	底径10.6cm。底部はヘラ切り。		包含層
2231	18	須恵器・杯B	-	底径10.4cm。底部ヘラ切り後に回転ヘラケズリ調整。内面仕上げナデ。		包含層
2232	18	須恵器・杯B	-	底径9.6cm。底部はヘラ切り。内面仕上げナデ。		包含層
2233	18	須恵器・杯B	13.8	底径9.7、器高3.5cm。底部はヘラ切り。		S D04、包含層
2234	18	須恵器・杯B	13.8	底径8.3、器高4.0cm。底部はヘラ切り。内面仕上げナデ。		包含層
2235	18	須恵器・杯B	14.3	底径9.1、器高4.6cm。底部はヘラ切り。		包含層
2236	18	須恵器・杯B	10.8	底径8.0、器高3.0cm。		S N01
2237	18	須恵器・杯B	9.9	底径4.9cm、器高3.7cm。		S B04
2238	18	須恵器・杯B	10.4	底径5.5、器高4.2cm。底部はヘラ切り。		包含層
2239	18	須恵器・杯B	10.2	底径6.3、器高4.0cm。底部はヘラ切り。		S N01
2240	18	須恵器・縁杯	12.0			VI層上面
2241	18	須恵器・縁杯	10.8			包含層
2242	19	須恵器・平瓶	17.5	口頭部に柳條波状文。		S B01、包含層
2243	19	須恵器・長頸瓶	-	口頭部に3条の沈線。		S N01
2244	19	須恵器・双耳瓶	-	肩部に凸帯がつく。		包含層
2245	19	須恵器・壺	23.1	胴部外側は平行叩き、内面同心円文當て具痕。		包含層
2246	19	須恵器・壺	24.6	胴部外側は平行叩き、内面同心円文當て具痕。		S D03
2247	19	須恵器・壺	21.9	胴部外側は平行叩き、内面同心円文當て具痕。頸部内面に指摘痕。		S D04
2248	20	須恵器・壺	-	口頭部に柳條波状文。		包含層
2249	20	須恵器・壺	-	胴部外側は平行叩き、内面同心円文當て具痕。		包含層
2250	20	須恵器・壺	38.0	胴部外側は叩き後にカキメ、内面は當て具痕後にナデ。		S N01、包含層
2251	20	須恵器・鏡	-	銘の環状把手部分。		包含層
2301	20	白磁・碗	14.0	正緑状の口縁部。		包含層
2302	20	白磁・碗	-	見込みに段をもつ。		包含層
2303	20	白磁・碗	-	見込みに鰐目文。		包含層

参考文献

- 宇野隆大 1996 「古代莊園研究と考古学」『日本古代莊園』 東京大学出版会
- 大野 宏 2009 「七世紀の遺跡からみた越中四郡」『古代の越中』 高志書院
- 小田木治太郎 1989 「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学Ⅱ』 石川考古学研究会
- 小矢部市 2002 『小矢部市史－おやべ風土記編』
- 金田章裕 1998 「古代莊園図と景観」 東京大学出版会
- 金田章裕 1999 「古地図から見た古代日本」 中公新書
- 大門町教育委員会 1998 「二口油免遺跡発掘調査概要」
- 高岡市教育委員会 1985 「西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅱ」
- 高岡市教育委員会 1995 「石塚遺跡調査概報Ⅲ」
- 高岡市教育委員会 2000 「須田藤の木遺跡調査報告」
- 高岡市教育委員会 2000 「市内遺跡調査概報X」
- 高岡市教育委員会 2000 「問戸遺跡調査報告」
- 高岡市教育委員会 2004 「問戸遺跡調査報告Ⅱ」
- 高岡市教育委員会 2004 「問戸遺跡調査報告Ⅲ」
- 高岡市教育委員会 2004 「山内遺跡調査概報 XIV」
- 高岡市教育委員会 2005 「岩坪岡田鳥遺跡調査概報」
- 高岡市教育委員会 2005 「市内遺跡調査概報 XV」
- 高橋浩二 2000 「古墳出現期における越中の土器様相」『庄内式土器研究』22 庄内式土器研究会
- 太宰府市教育委員会 2000 「大宰府条坊跡 XV - 陶磁器分類編 -」
- 田嶋明人 1986 「IV考察 - 漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡 I』 石川県立埋蔵文化財センター
- 立山町教育委員会 2001 「利田横枕遺跡」
- 富山县文化振興財團 2004 「埋蔵文化財調査概要 - 平成15年度 -」
- 富山县文化振興財團 2004 「黒河尻目・黒河中老田遺跡発掘調査報告」
- 富山县文化振興財團 2007 「岩坪岡田鳥遺跡・手洗野赤浦遺跡・近世北陸道遺跡発掘調査報告」
- 富山县文化振興財團 2008 「板屋谷内B・C古墳群・堂前遺跡発掘調査報告」
- 富山市教育委員会 2008 「富山市八町II遺跡発掘調査報告書」
- 根津明義 2004 「越中国射水郡における東大寺領諸莊について」『富山史稿』147号 越中史壇会
- 根津明義 2005 「東大寺領須加莊の所在にかかる考古学的考察」『富山史稿』148号 越中史壇会
- 根津明義 2009 「古代越中における官衙的様相と在地社会」『古代の越中』 高志書院
- 西井龍儀 1987 「頭川問戸遺跡・寺庭寺」『北陸の古代寺院 - その源流と古瓦』 杜書房
- 和出一郎 1959 「万葉の古蹟」「越中の東大寺盤田」「高岡市史 上巻」 青林書院新社

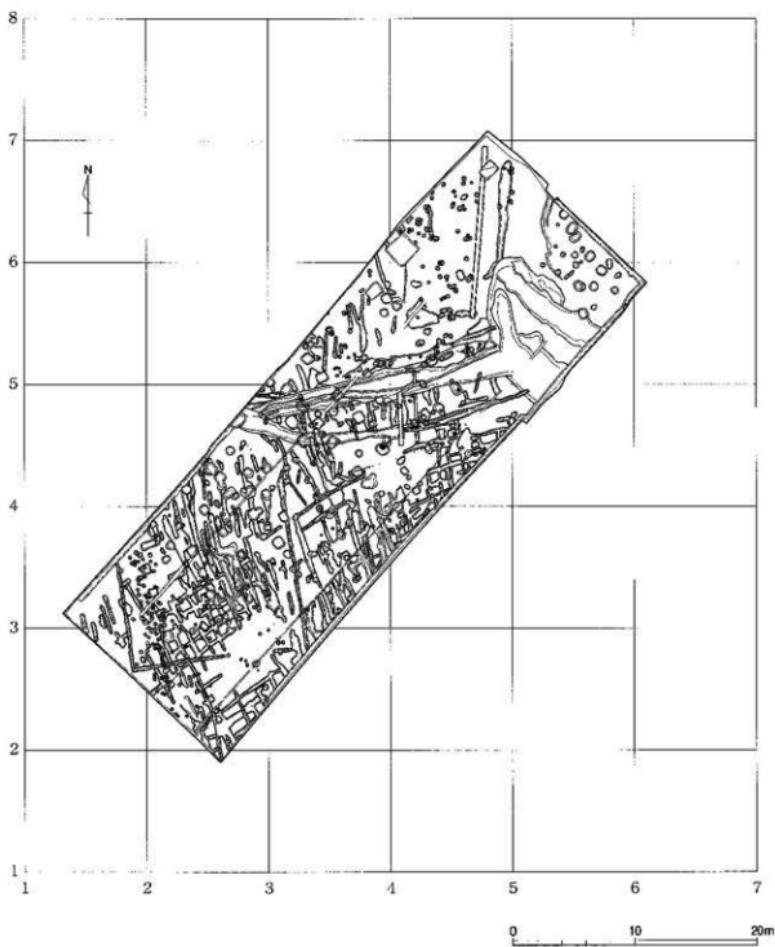
報告書抄録

ふりがな	いわつぼおかだじまいせきちょうさがいほう2						
書名	岩坪岡田島遺跡調査概報Ⅱ						
副書名	株式会社高井による古社工場の建設に伴う平成22年度の調査						
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報						
シリーズ番号	第71冊						
編著者名	常澤尚						
発行機関	高岡市教育委員会						
所在地	〒933-8601 富山県高岡市広小路7番50号						
収集機関	有限会社毛野考古学研究所						
所在地	〒379-2146 舞鶴市前橋市公田町1002番地1						
発行年月日	西暦 2011年3月25日						
ふりがな	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	発表面積	調査原因
所収遺跡	市町村 遺跡番号	遺跡番号	°	°			
岩坪岡田島遺跡	富山県高岡市 園吉	016202	202233	36° 46° 02°	136° 58° 16°	101125 101228	970m ² 工場建設
所収遺跡名	種別	主な時代	土な遺構	主な遺物	特記事項		
岩坪岡田島遺跡	集落跡	古墳時代 古代 中世	柵址8条 掘立柱建物址7棟 溝5条 上坑3基 礎状遺構 凹地	上部器 須恵器 白磁 珠洲 土拂、輪刃 柱材、磚板 磨製石斧、砥石	畿内布留式窓が出土 古代の掘立柱建物址群 を検出		

図 面

図面目次

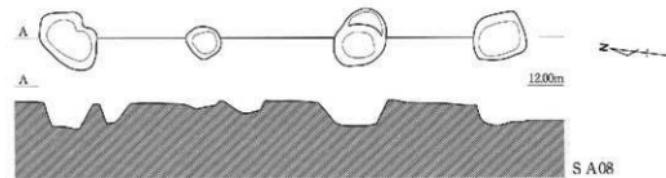
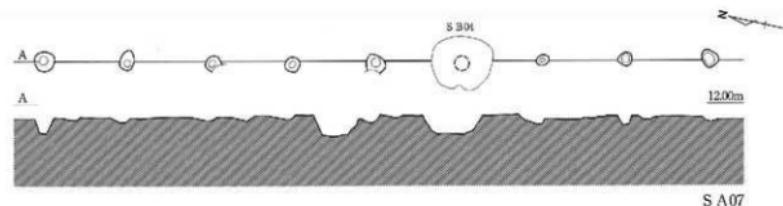
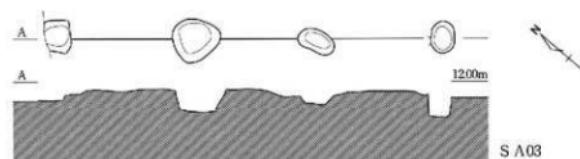
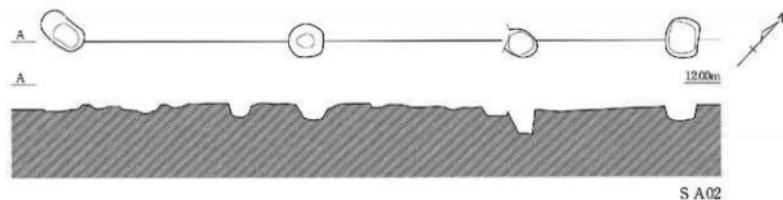
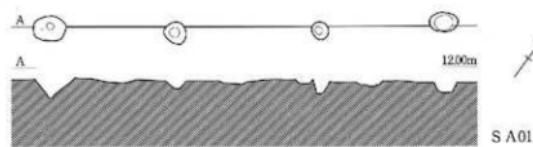
- 図面01 遺構実測図 調査地区全体図（1／400）
図面02 遺構実測図 遺構全体図（1／200）
図面03 遺構実測図 横址 S A01～03・07・08実測図（1／80）
図面04 遺構実測図 挖立柱建物址 S B01実測図（1／80、1／40）
図面05 遺構実測図 横址 S A04・05・掘立柱建物址 S B02実測図（1／80）
図面06 遺構実測図 1. 挖立柱建物址 S B03実測図（1／80）
2. 掘立柱建物址 S B07実測図（1／80）
図面07 遺構実測図 掘立柱建物址 S B04実測図（1／80、1／40）
図面08 遺構実測図 挖立柱建物址 S B05実測図（1／80）
図面09 遺構実測図 横址 S A06、掘立柱建物址 S B06実測図〔1〕（1／100）
図面10 遺構実測図 横址 S A06、掘立柱建物址 S B06実測図〔2〕（1／100、1／40）
図面11 遺構実測図 潟 S D01～05、凹地 S X01・02実測図（1／150）
図面12 遺構実測図 潟 S D01～05、凹地 S X01・02実測図（1／80）
図面13 遺物実測図 土器類 古墳時代の土師器（1／3）
図面14 遺物実測図 土器類 古墳時代の土師器（1／3）
図面15 遺物実測図 土器類 古墳時代の土師器、須恵器（1／3）
図面16 遺物実測図 土器類 古代の土師器（1／3）
図面17 遺物実測図 土器類 古代の須恵器（1／3）
図面18 遺物実測図 土器類 古代の須恵器（1／3）
図面19 遺物実測図 土器類 古代の須恵器（1／3）
図面20 遺物実測図 土器類 古代の須恵器、白磁（1／3）
土製品 土鍤（1／3）



四面〇二 遺構実測図

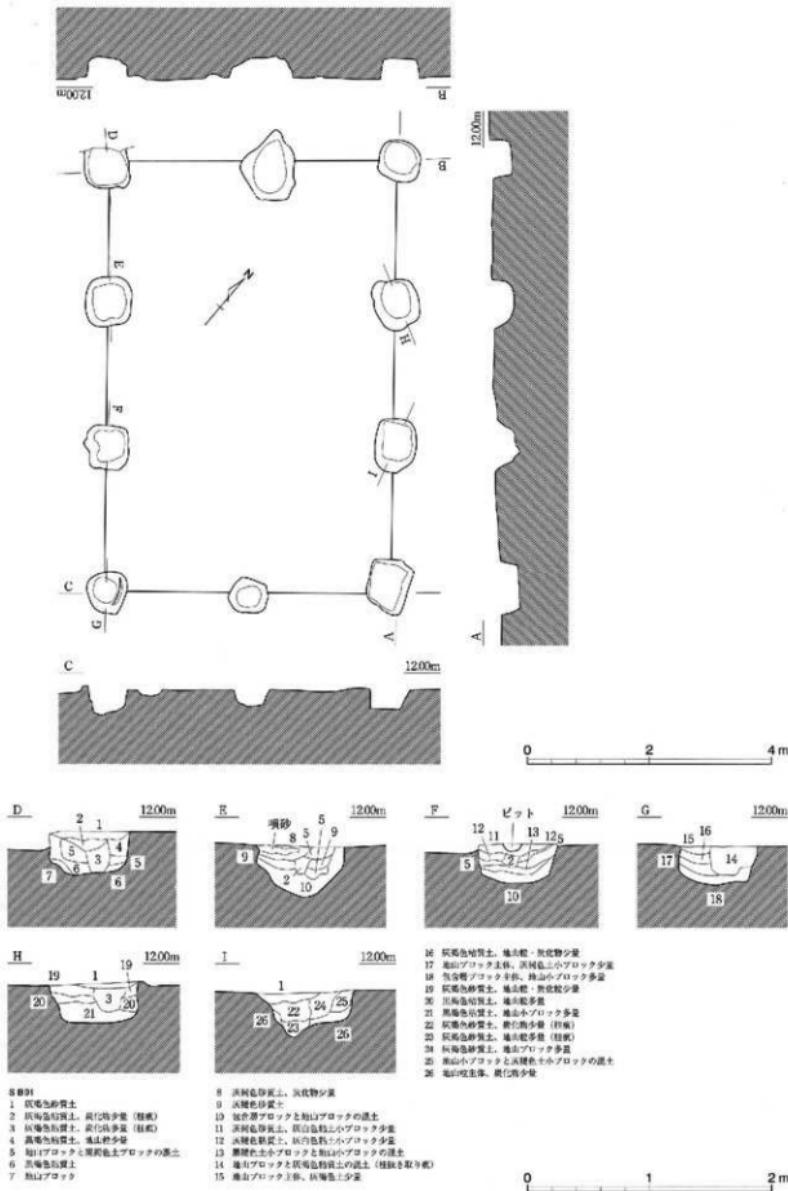


図面〇三
遺構実測図



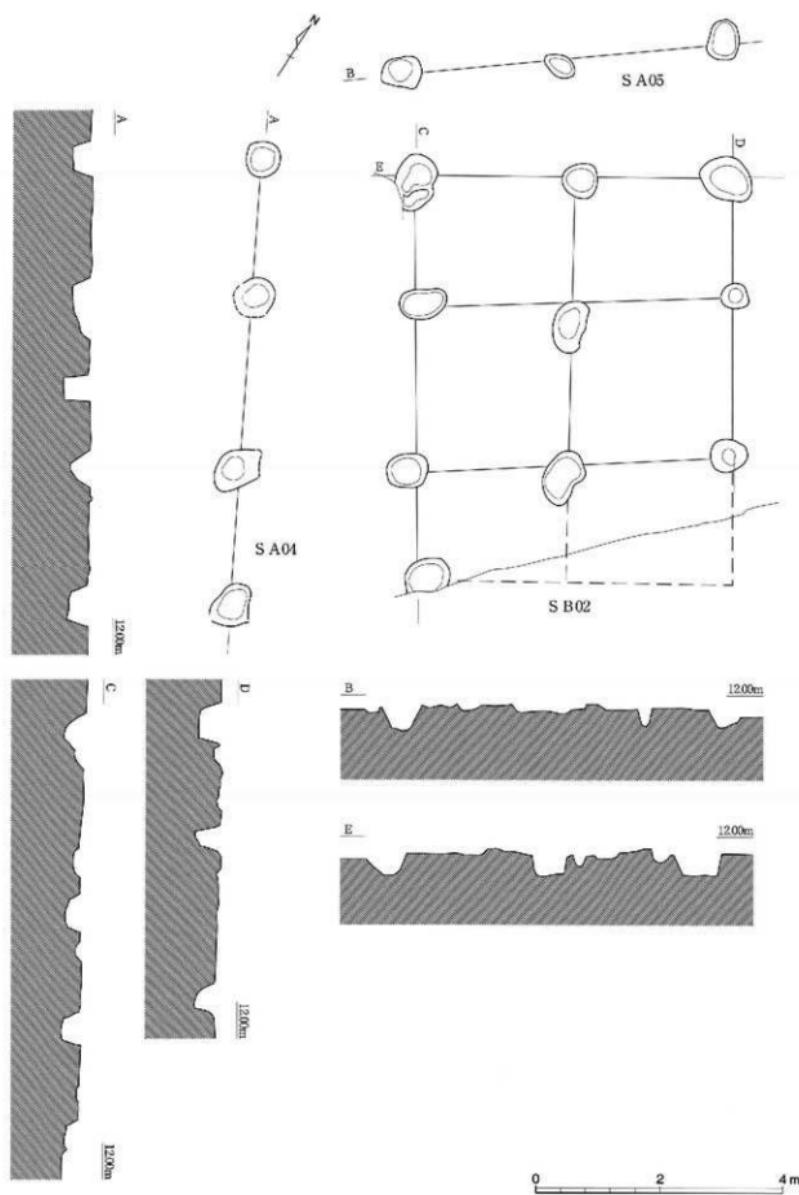
0 2 4 m

図面〇四
造構実測図



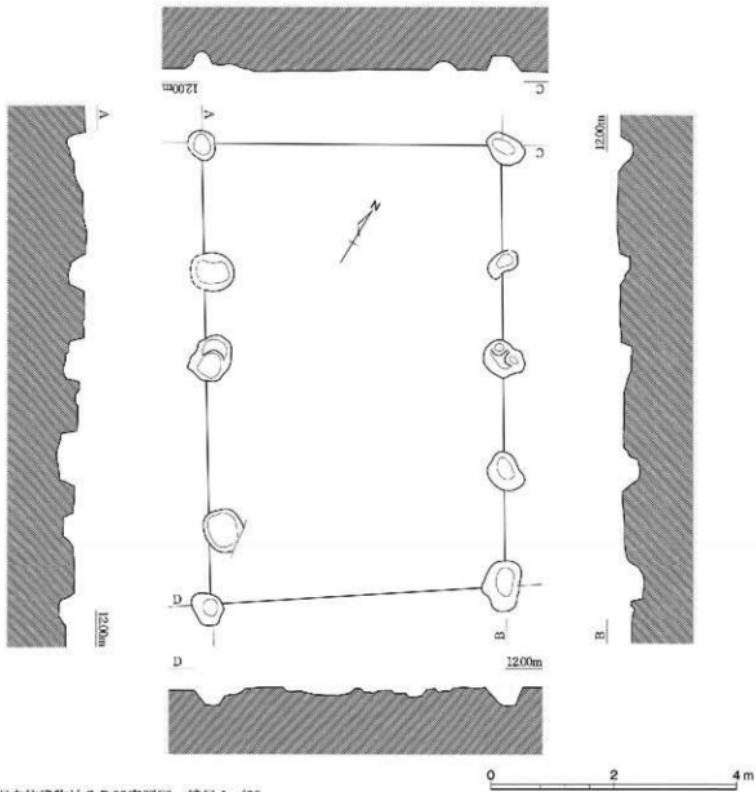
掘立柱遺物場 S B01実測図 編尺 1/80, 1/40

図面〇五 造構実測図

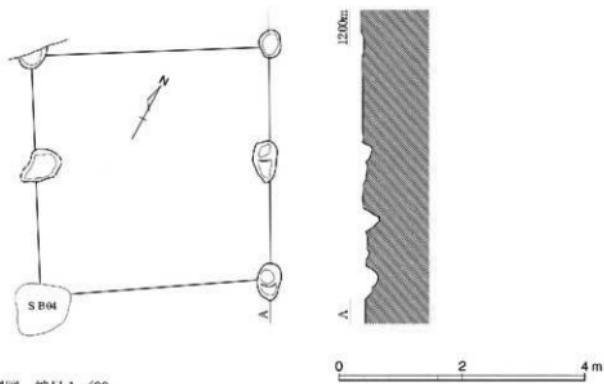


構址 S A04・05、獨立柱建物址 S B02実測図 縮尺 1/80

図面〇六 遺構実測図

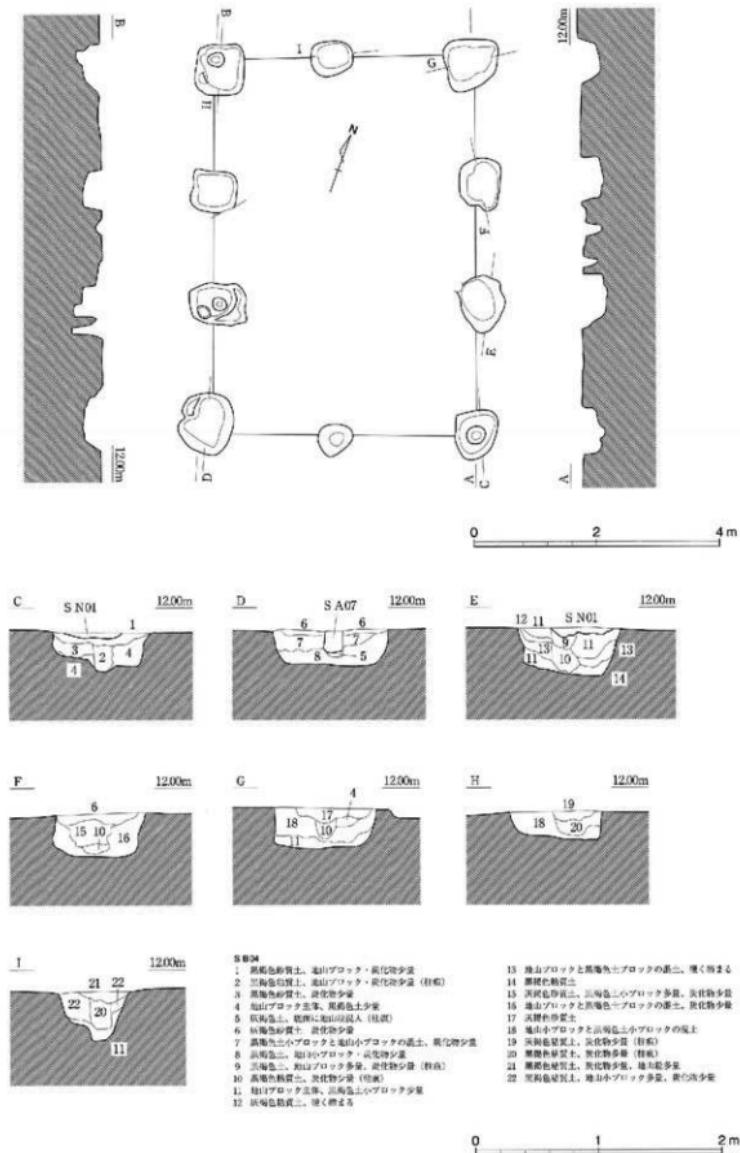


1. 掘立柱遺物址 S B03実測図 縮尺 1/80



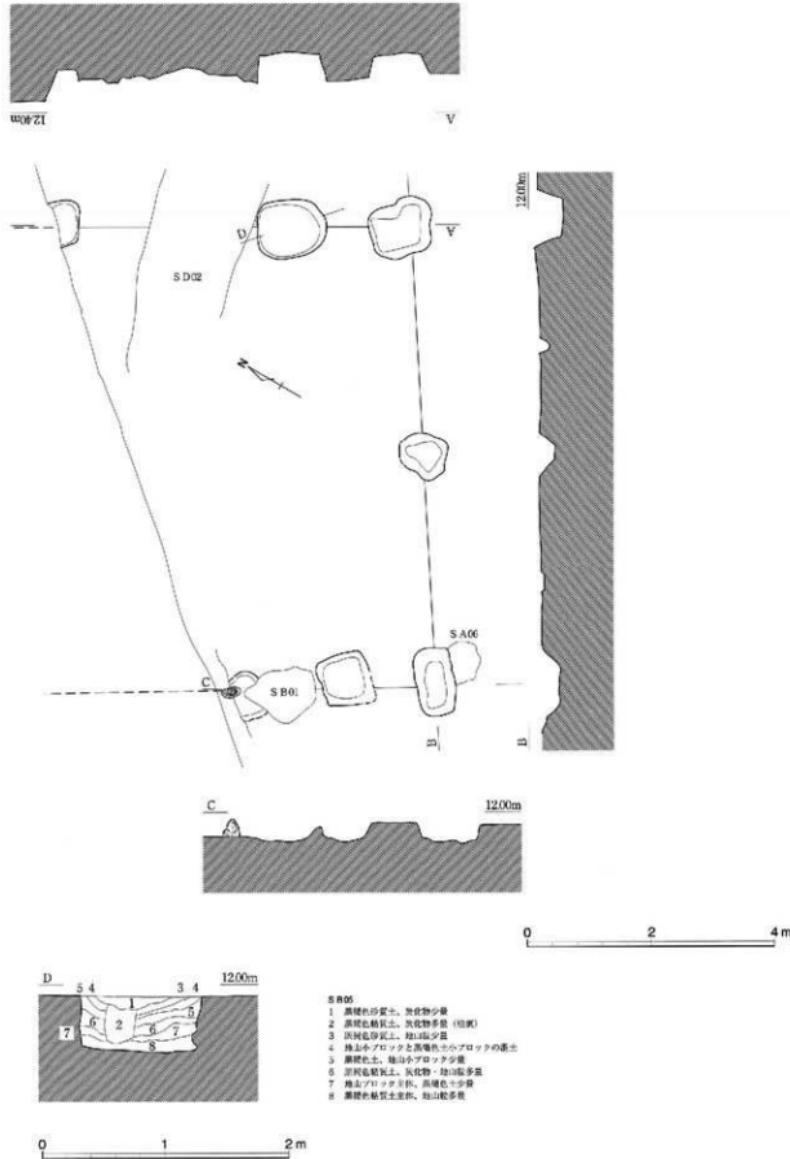
2. 掘立柱遺物址 S B07実測図 縮尺 1/80

図面〇七 遺構実測図

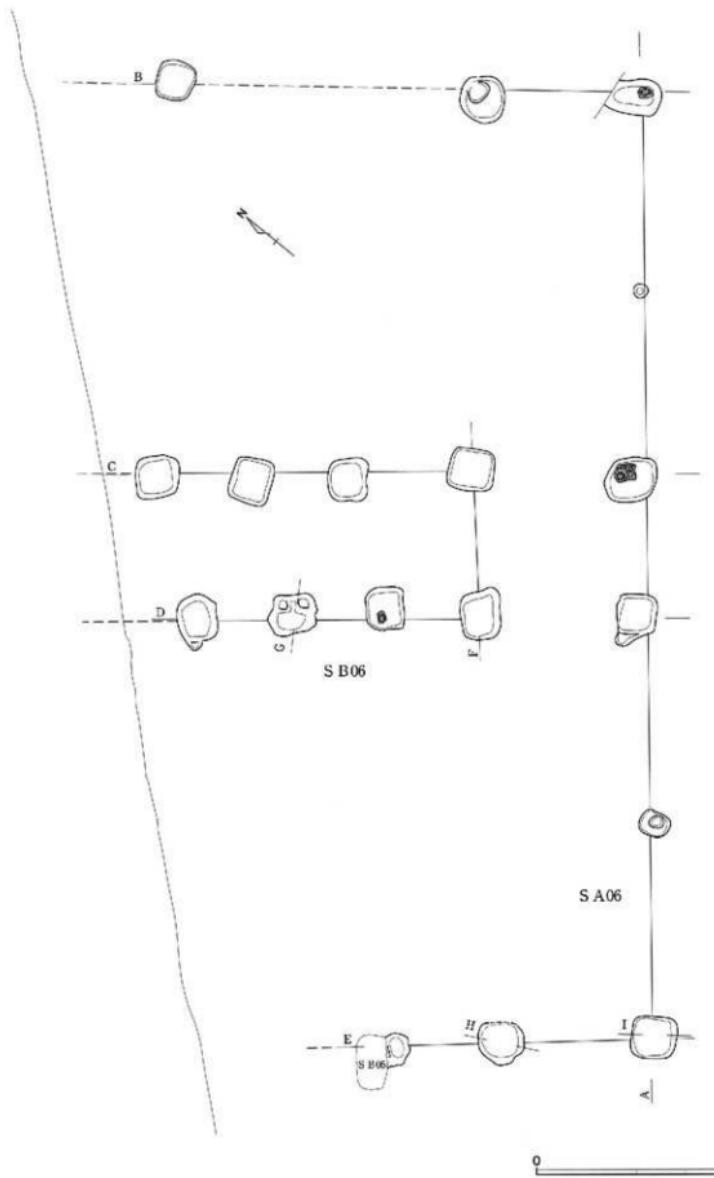


掘立柱建物址 S B04実測図 比尺1/80、1/40

図面〇八
遺構実測図

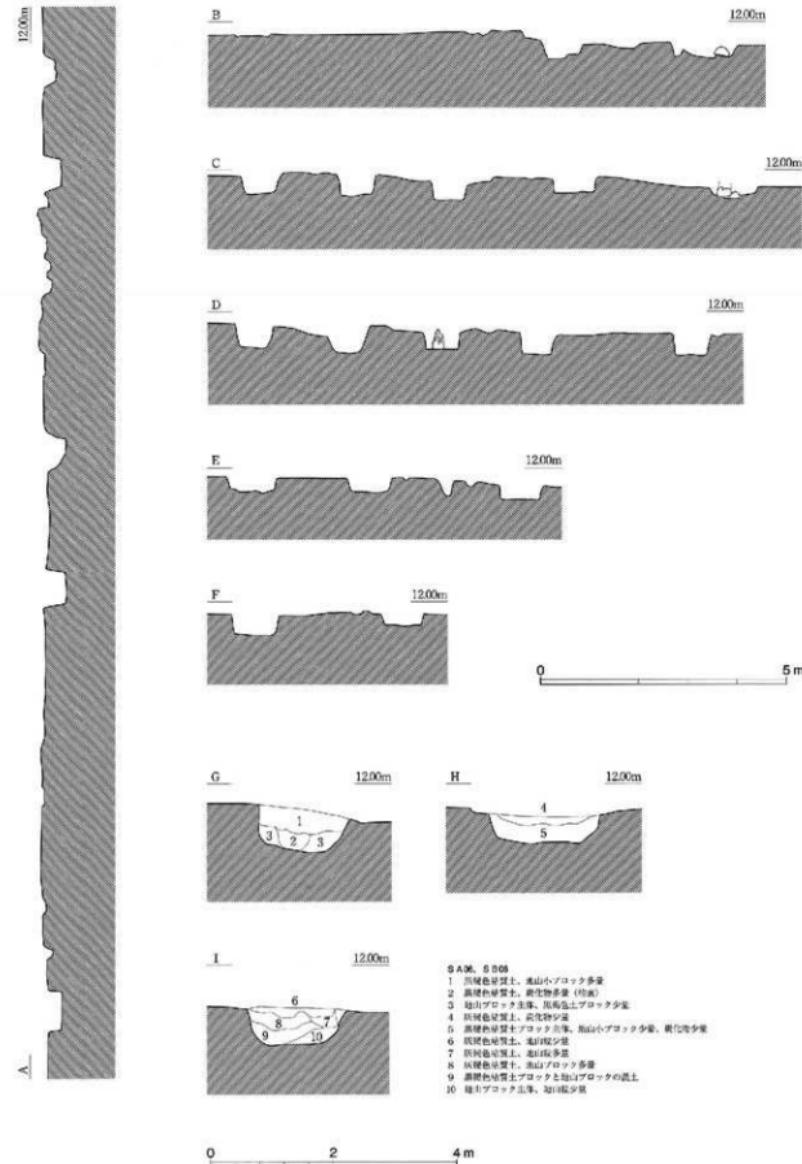


掘立柱建物址 S B05実測図 縮尺 1/80, 1/40



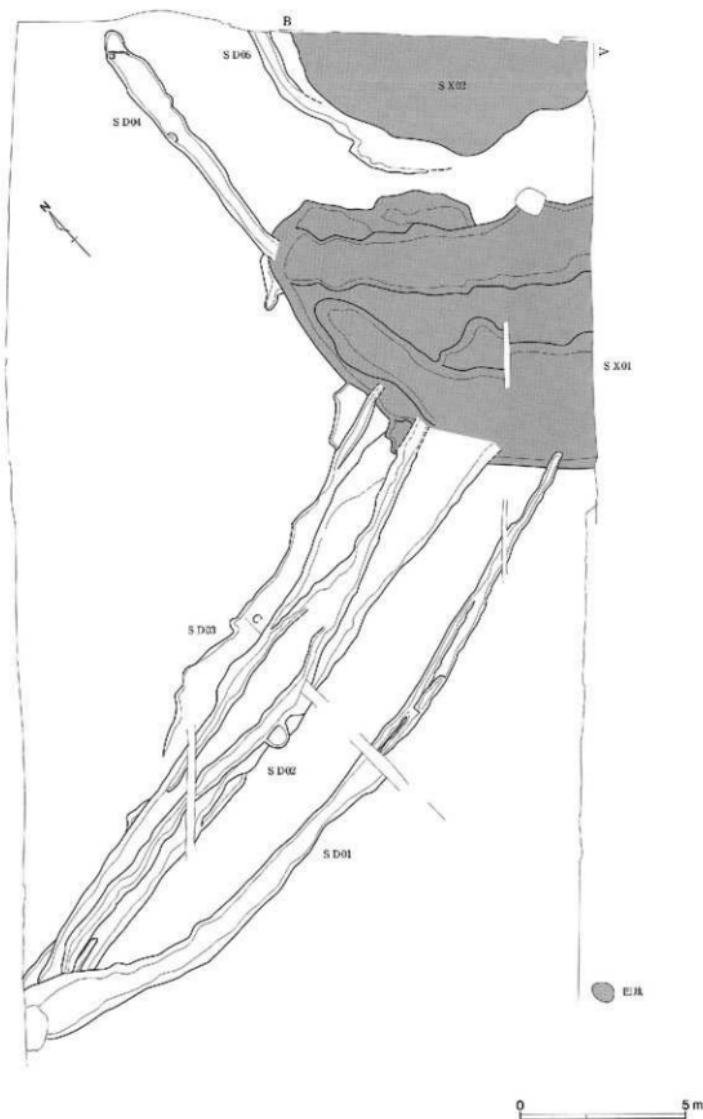
構址 S A06、掘立柱建物址 S B06実測図〔1〕 縮尺1/100

図面一〇 遺構実測図



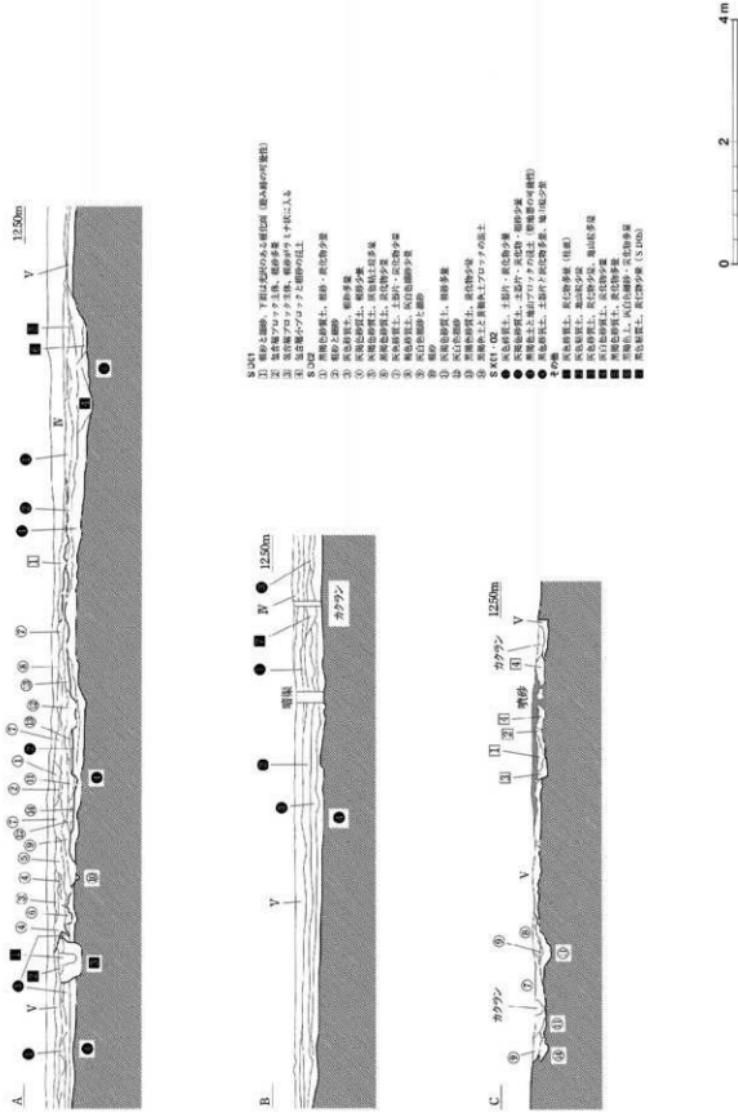
柵址 S A06、掘立柱建物址 S B06実測図〔2〕 縮尺1/100、1/40

図面一一
造構実測図



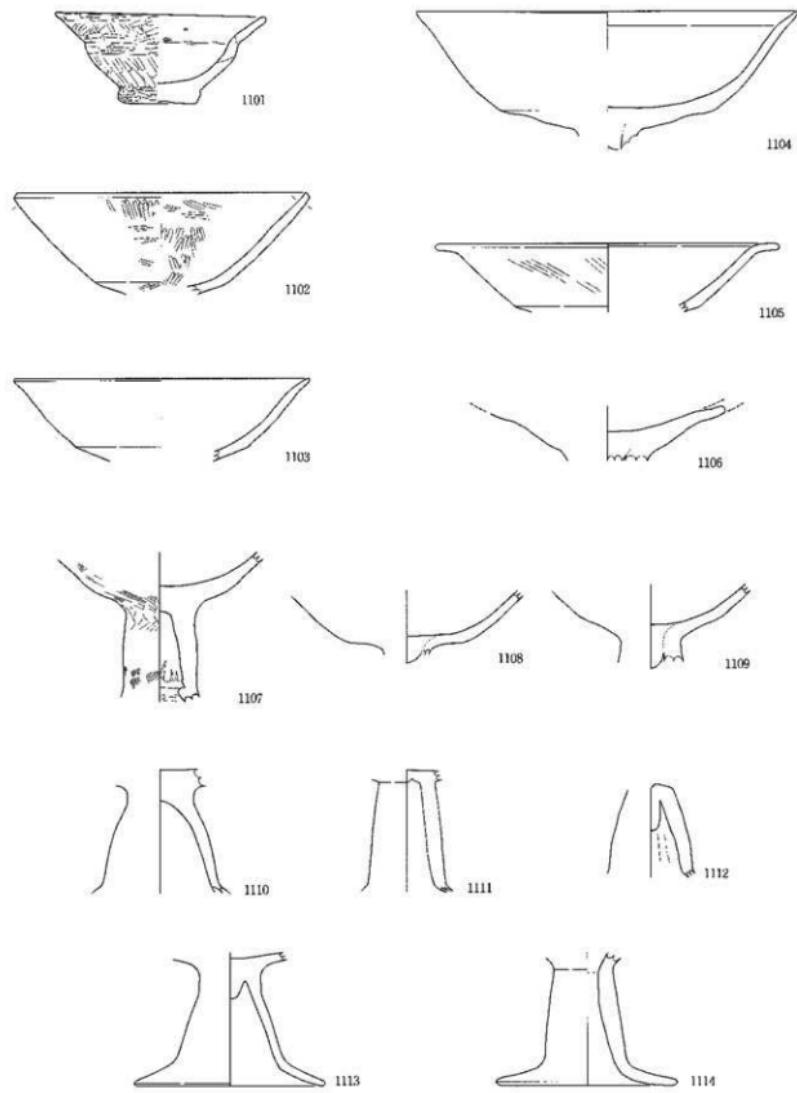
溝 S D01~05、凹地 S X01・02実測図 緯尺 1/150

二、面図
遺構実測図



溝S D01-05、凹地S X01-02実測図〔2〕 比尺1/80

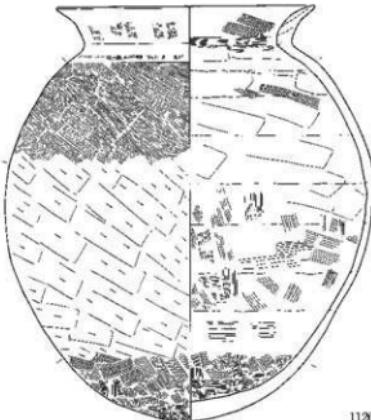
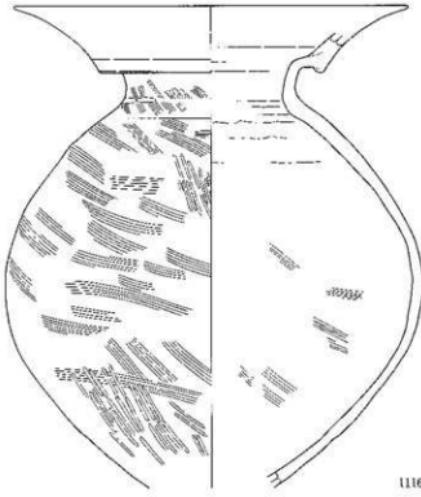
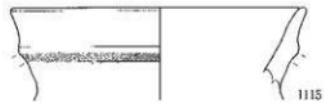
図面一三 遺物実測図



J:器類 古墳時代の土師器：1101～1114

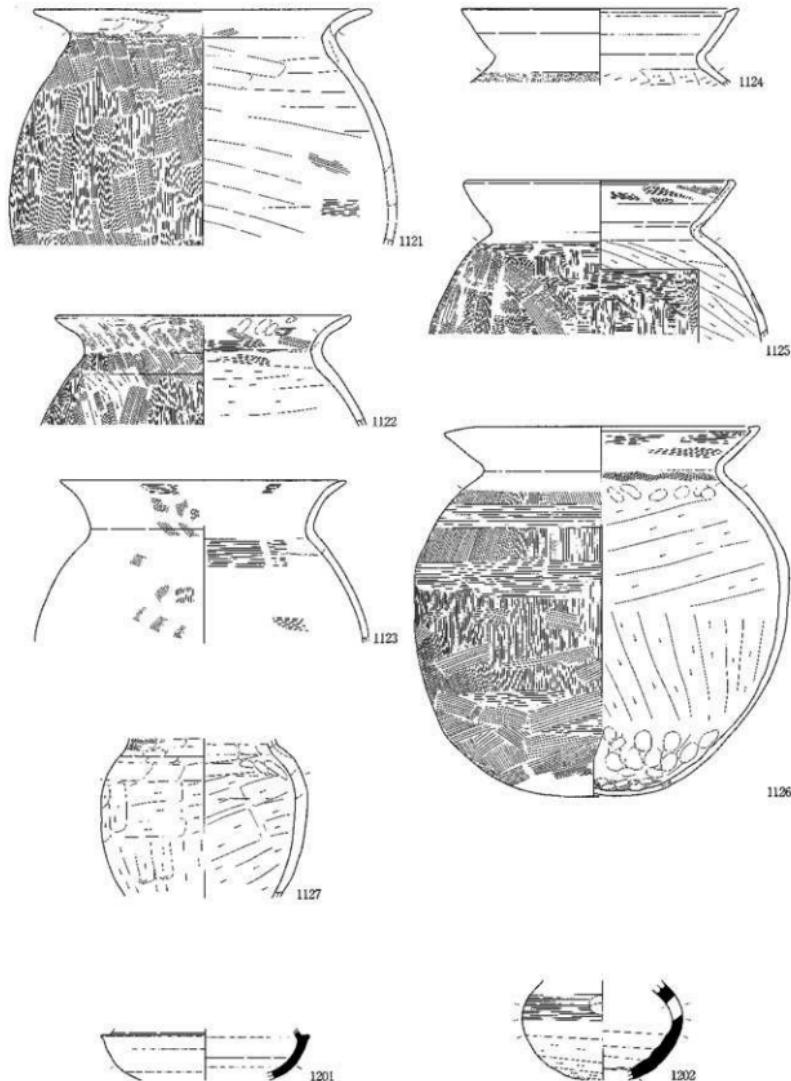
スケル 1/3

図一四 遺物実測図



0 5 10cm

図面一五 遺物実測図

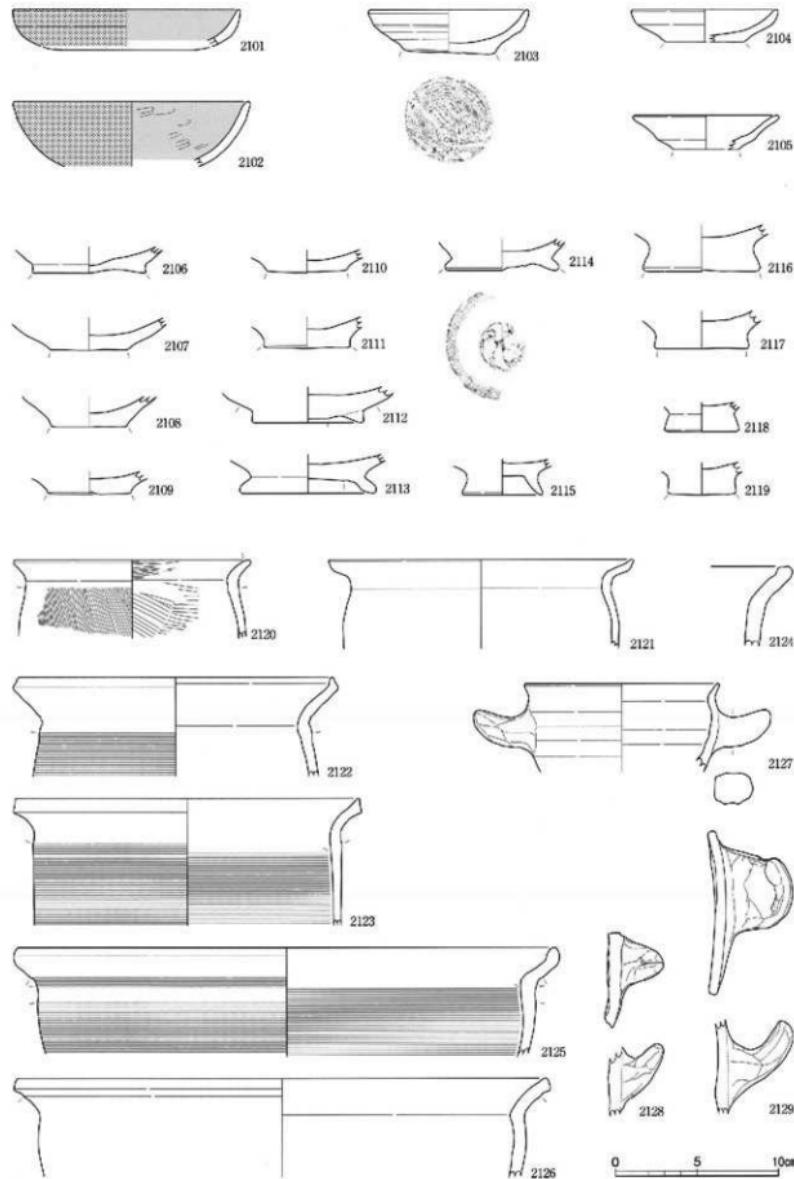


0 5 10cm

土器類 古墳時代の土師器：1121～1127、古墳時代の須恵器：1201～1202

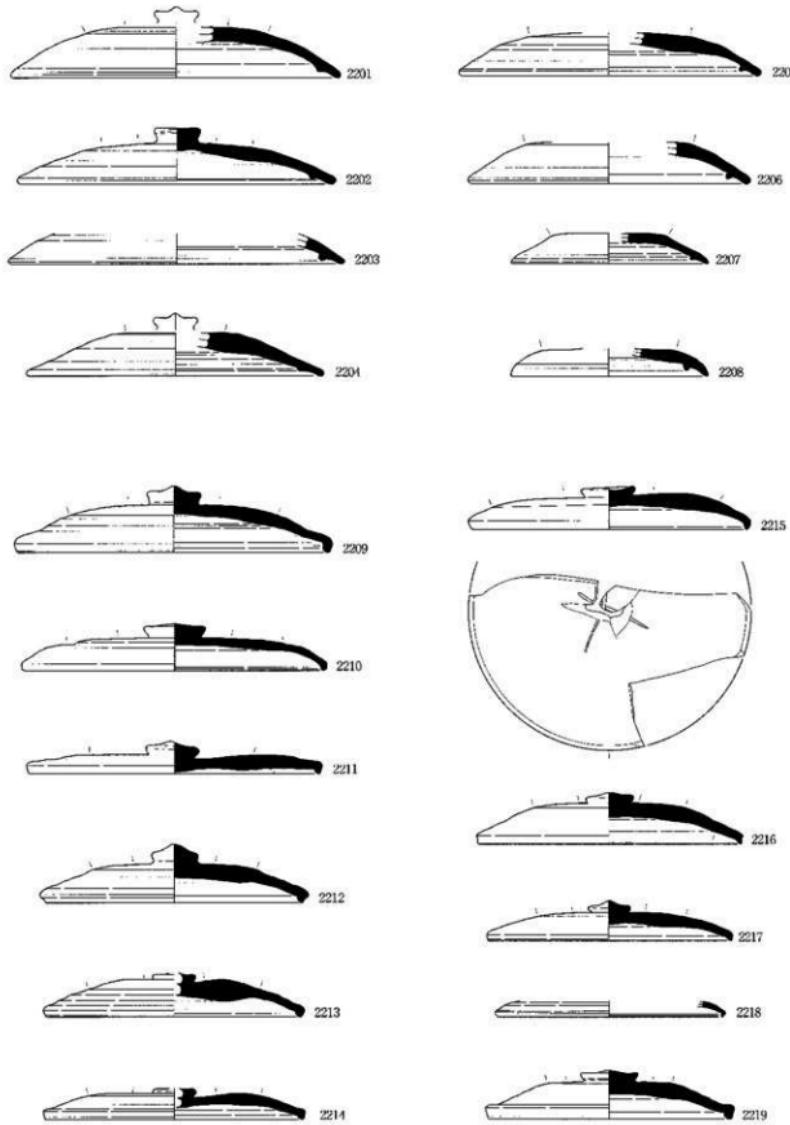
縮尺 1/3

図面一六
遺物実測図



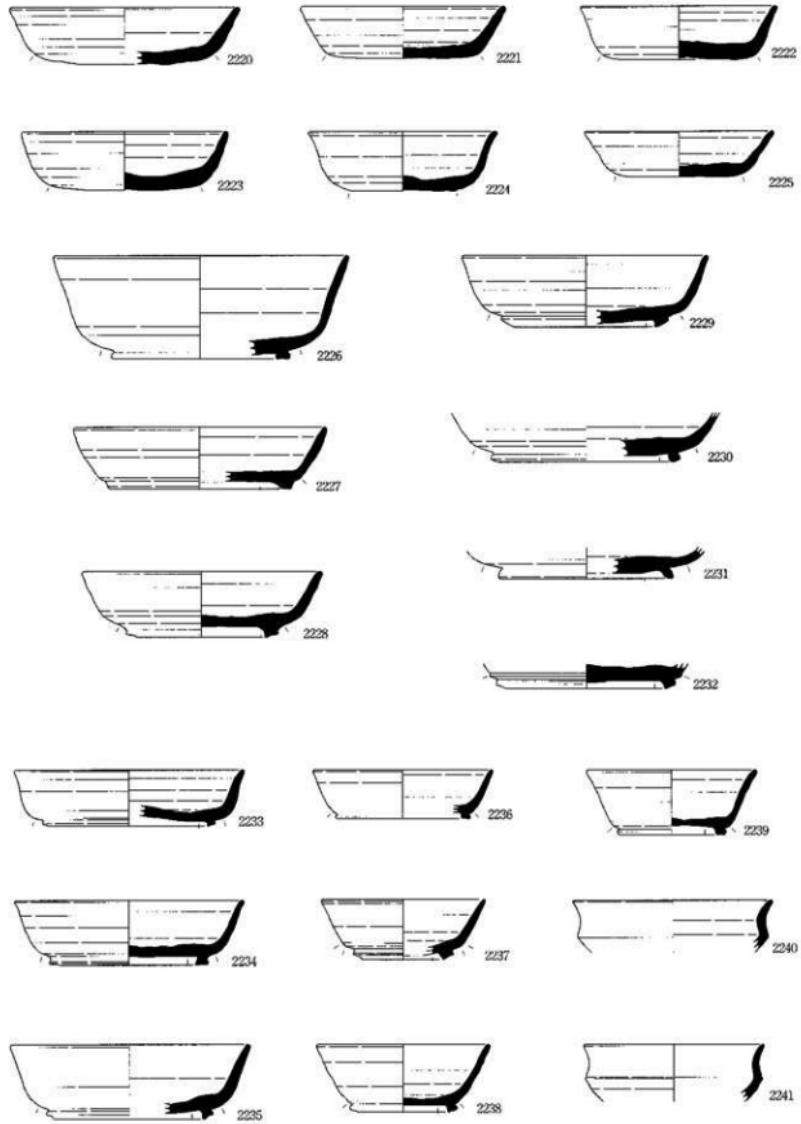
土器類 古代の土器器：2101～2129

縮尺 1 / 3



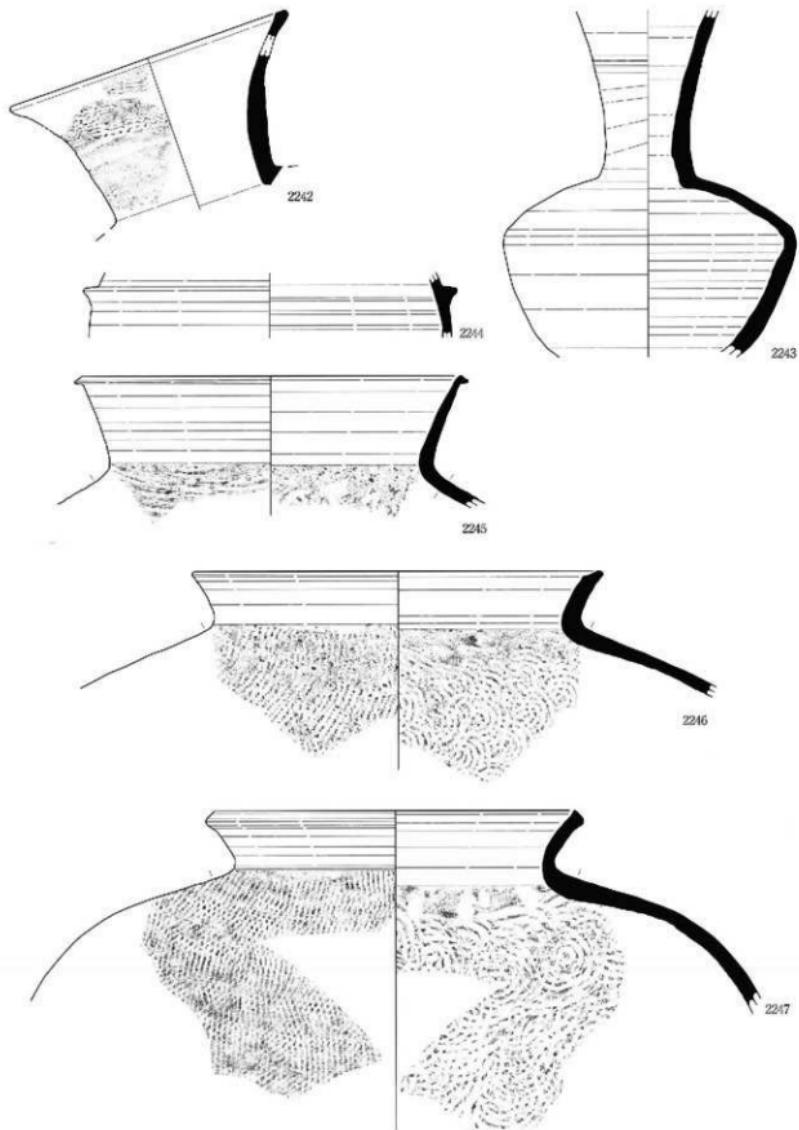
0 5 10cm

図面一八
遺物実測図

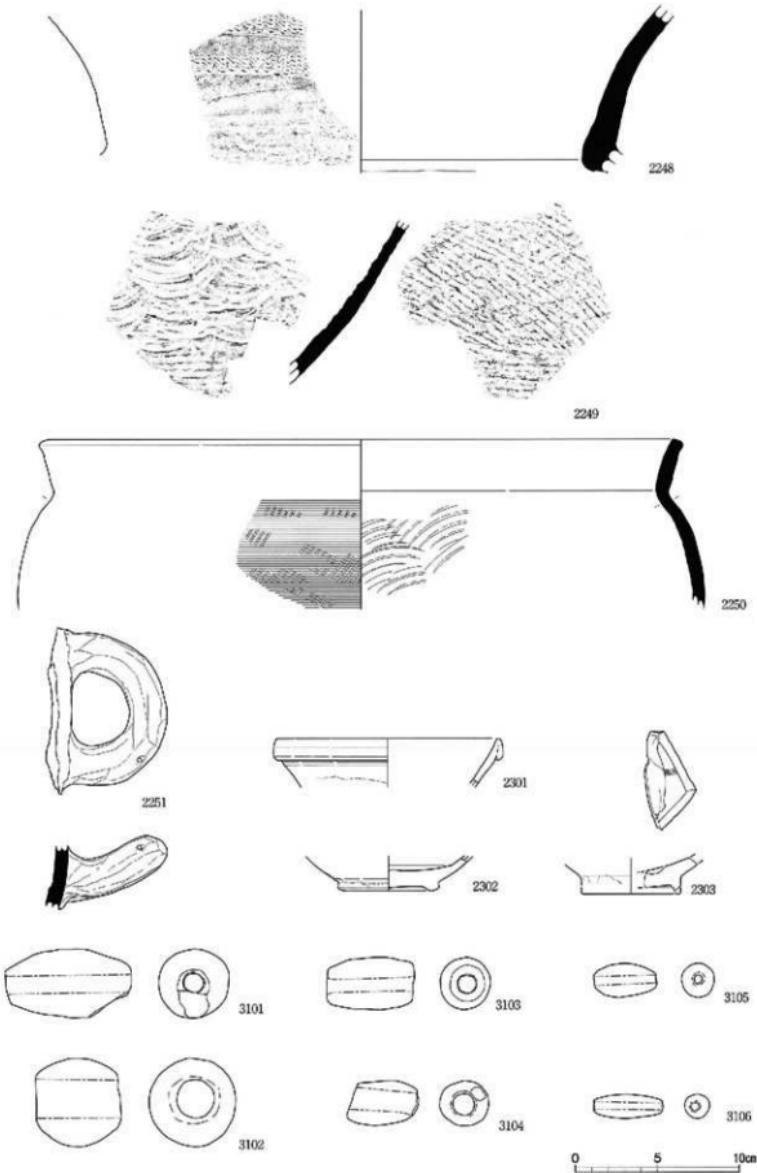


0 5 10cm

図面一九 遺物実測図



図面二〇 遺物実測図



土器類 古代の須恵器：2248～2251、白磁：2301～2303
土製品 土錐：3101～3106

縮尺 1/3

図 版

図 版 目 次

- 図版01 遺構写真 1. 調査地区空撮（南東）
2. 調査地区全景（東）
- 図版02 遺構写真 1. 調査地区全景（北東）
2. 調査地区全景（上が北西）
- 図版03 遺構写真 1. 掘立柱建物址 S B01・03・04全景（北西）
2. 掘立柱建物址 S B02・06全景（北西）
- 図版04 遺構写真 1. 横址 S A06柱根及び隨板出土状態（南東）
2. 掘立柱建物址 S B06柱根出土状態（北東）
- 図版05 遺物写真 古墳時代の土器類
- 図版06 遺物写真 1. 古墳時代の土器類
2. 古代の土器類
- 図版07 遺物写真 古代の土器類、磨製石斧
- 図版08 遺物写真 木製品 柱材、檻板



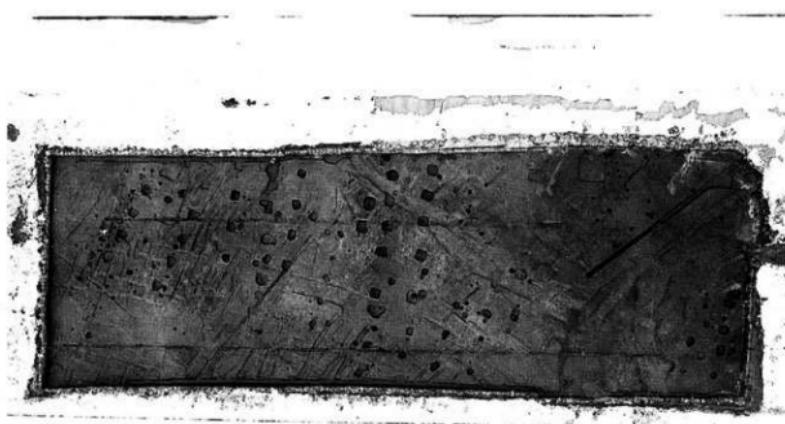
1. 調査地区空撮（南東）



2. 調査地区全景（東）



1. 調査地区全景（北東）



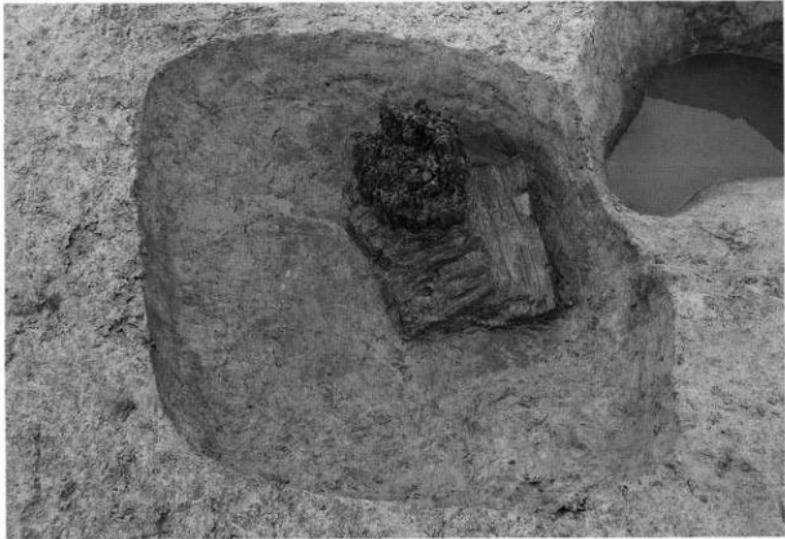
2. 調査地区全景（上が北西）



1. 挖立柱建物址 S B01・03・04 全景（北西）



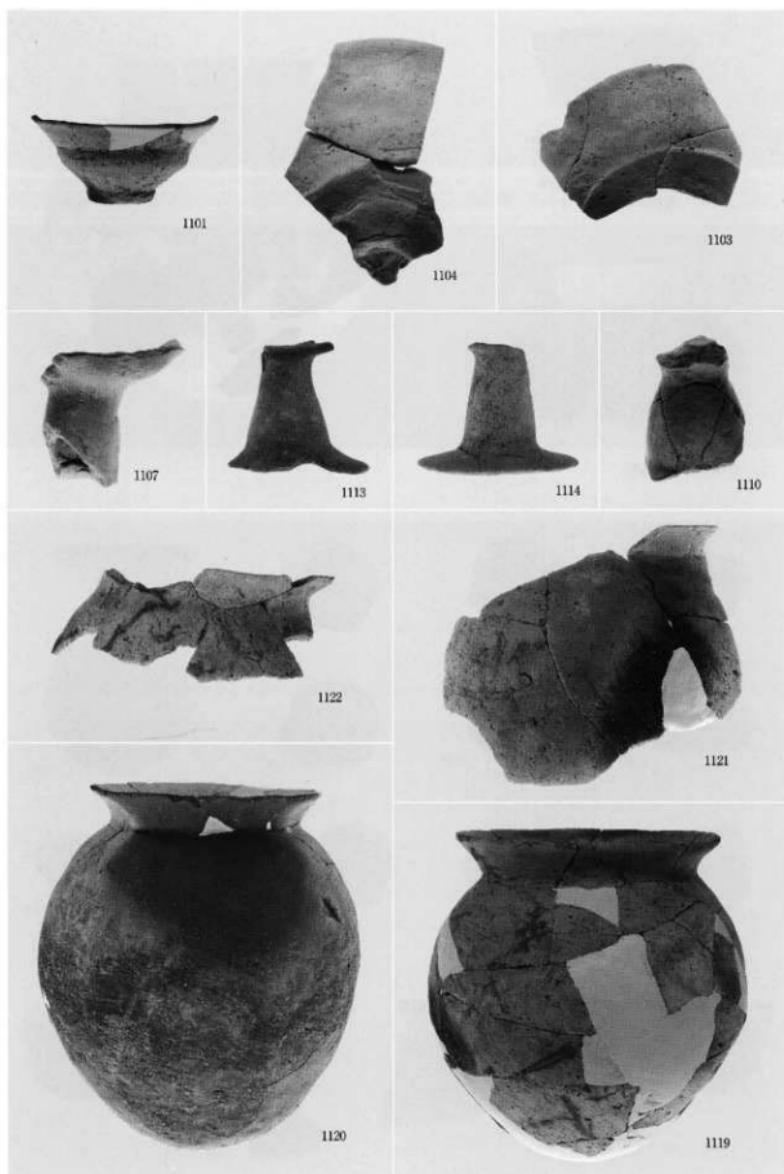
2. 挖立柱建物址 S B02・06 全景（北西）



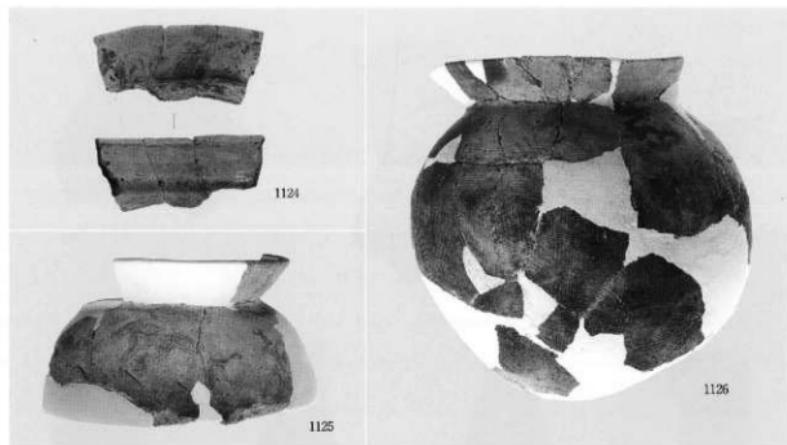
1. 横址 S A 06 柱根及び礎板出土状態（南東）



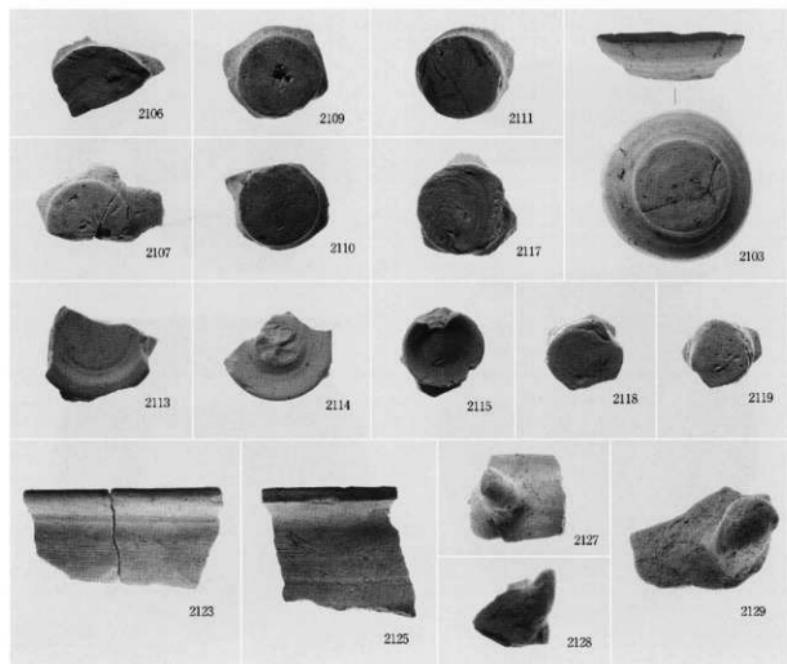
2. 捜立柱建物址 S B 06 柱根出土状態（北東）



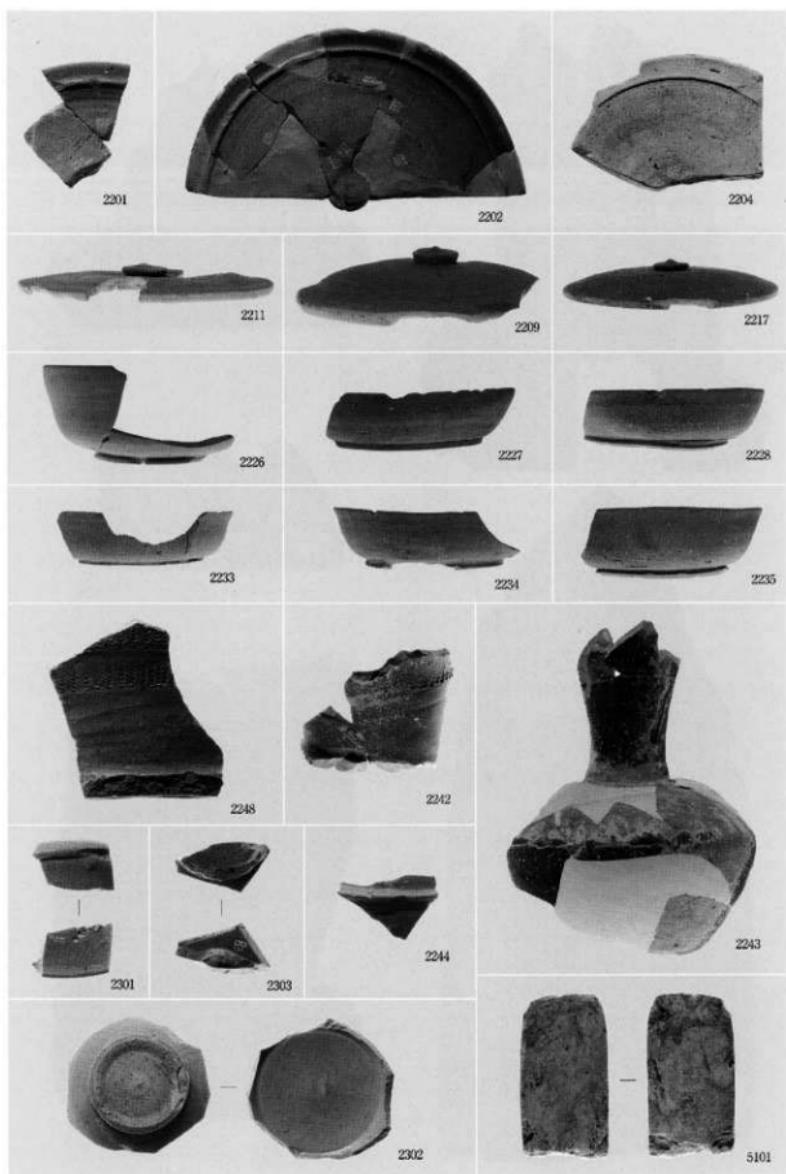
古墳時代の土器類



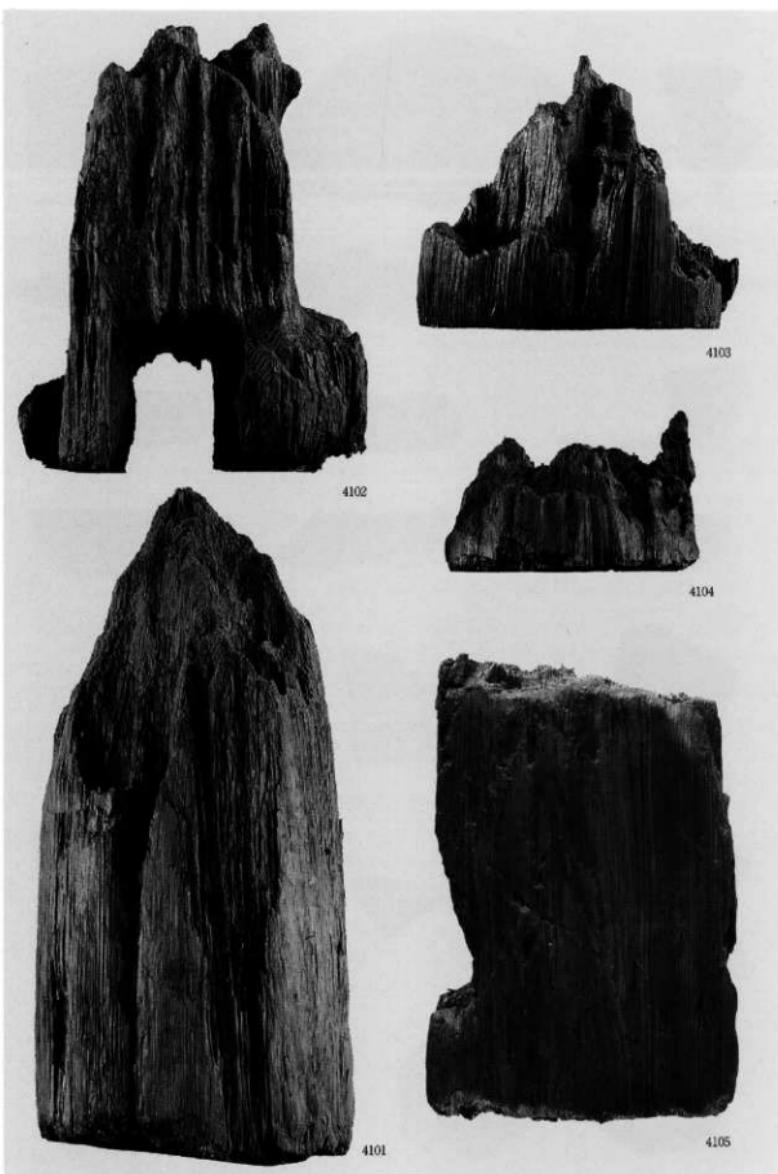
1. 古墳時代の土器類



2. 古代の土器類



古代の土器類、磨製石斧



木製品 柱材・檻板

高岡市埋蔵文化財調査概報第71冊

岩坪岡田島遺跡調査概報Ⅱ

2011年3月25日

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

印刷所 中村印刷工業株式会社

富山県富山市東町2丁目3番22号

